92-278

南條文雄先生題辭

一色雲岫著述

教育應用禪學捷徑

東京　臥龍閣藏版

明治三年

孝義錄

東京大學圖書之印

凡夫迷真而逐妄智慧
化為貪神聖之水湯
易波不離水聖人悟
妄而悟真識神轉為

知慧譬之波平ラ水當
體無波

辛丑八月一日錄明屠漳真悟以代
一色君禪學之捷徑ト題辭

原子李傳文旌

教育應用禪學捷徑目次

第壹章　總論……一
第貳章　禪學と教育の關係……一〇
第參章　禪學と哲學の關係……一四
第四章　禪學と生理醫學上の關係……二一
第五章　禪學と忠孝の關係……二五
第六章　禪學の効用と必要……三三
第七章　禪學の快樂と目的と結果……三九
第八章　禪學の種類……四二
第九章　禪學の方法……五四
第十章　禪學の手引……六二

目次

禪學捷徑附錄
禪學と靈魂不滅と南無阿彌陀佛と南無妙法蓮華經との關係

教育應用

禪學捷徑

一色雲嵒著述

第壹章 總論

さて禪と云ふことに就て一言して置かねばならぬが一体世間之人が禪と云へば獨り佛敎の專有物の樣に思て居るが是りや禪と云ふ意味を知らぬからである又古の印度に於て九十五種の學派が有つたが皆多少禪學を修めぬは無かつたので夫のみならず支那日本の古代に於ては甚だ行はれて有つた其が漸々衰微を來た

(二)

したと云ふものは種々の事狀があるけれど要するに禪と云ふものを世俗的に解釋するものが尠かつたからであるされど今日往々流布の兆を萌したるは誠に結好なることで人間の價値を高上にする唯一の學問であると云ふことは後章を讀まば委しく分りますが禪と云ふは具に云ふと禪那と申して印度語であるから世人が別意味を有する樣に考へて居られるじやて夫れで禪とは靜慮と翻譯をしますので靜慮とは心念を靜めると云ふことであれば諸君が如何なる事業にせよ考究推測をなすには是非とも心を靜めて熟慮せねばならぬことで若し心が喧噪であつたならば決して旨い考の出ませんことは必然である是が乃ち禪の應用であつて夫れと少しく異なりてあると云ふのは上下淺深の區別があるばかりで別に世人が常に思ふやうな隔はないのである又佛法と云ふことにしても其の通り佛法と云へば直に地獄極樂が本場であるとか厭世主義であるとか丸で爪の先にも掛からぬ樣なことを云ふて居る人が多くあるが決してそんなことを目的とはせん又佛法は未來世的の者であるちふ考を持つ人が多いけれど之も大なる誤りで未來を論ずるは現世を重しとする所以で現世の原因が未來の結果であれば現世

佛教は厭世主義にあらざる事

(三)

が肝心である然らば現世的とは何であるかと云ふに佛法と云ふ字義上でも明瞭である佛とは矢張印度語で譯すると覺者とか無上尊とか種々の義があるので然らば何故に譯語を用ひぬかと云ふに一語にて無量の義を含有するが故に單に譯語の一を以てすると甚だ淺義となる故に一語に譯する事が出來ぬ解であるそれで佛と云ふは覺者又無上尊と云ふからして其は何であるかと云ふに乃ち至尊は天皇陛下である誠に覺丁の御方であると同じ事で法と云ふは法律政事である僧と云ふは是も印度語で譯して和合衆と云ふので和合とは社會國家と云ふことで衆とは人民と云ふと同然であるからして佛法僧と云ふことは今日の世態とは少しも違はんことであるして見れば吾人が日々の行は即ち佛法であつて名目か違ふと云ふのみで意義に於ては少しも違はんと云ふことは判然である然らば又佛教が厭世主義でないと云ふは佛教全体の目的に向つても明に分ることで佛教は實に人生を重んじたので昔し釋迦が或る時土を摘んで爪上に置き弟子の阿難と云ふ人に向つて言へる樣汝此爪上の土と大地の土と何を多とすと是りや云はずとしれたこと大地の土が多いに相違ないそこで釋迦の云へる樣人生を得ること

他の動物に比較をしたならば人生を得るは爪上の土の如くで動物の生を得ることは大地の土程であれば其人生の受け難きことは推して知るべきである然るに吾人が幸に人間に生れたと云ふは實に慶幸である」とさ其處で諸君好く考へて御覽じ人生誠に受難きである然云ふと乍ちに諸君は抹香臭いと云はるで有らうが然らば彼の近世哲學上に於て名を藏かしたる英國のハーバートスペンサーの進化論を完全なる道理と思ふかス氏の曰く世上の萬物は有機無機に論なく凡て進化の度に依りて木石人畜との差別があるので其原始に至つては少の差別はないと云て居るが其論法を一寸云て見やうなら其今日差別を見るのは二階三階五階と云樣なもので最下低と最高處とを比較するから差別が出來てくるので一分一厘一毛と云ふ微細の點より測つたならば何分何厘何毛より上が高と名け何分何厘より下が低いと云ふ限界であると云ふ譯には行かん復た大金と小金と云が如く何錢何厘何毛より以上が大金で以下が小金であると云ふ區別は出來ん復た何時何分何秒より晝である夜であるちふ限界は到底出來ぬと同じことで人間と木石と云ふも其通り最上と最下級とを見るから區別が生するのであるから其限界に至つては差別は少しもない證據に海綿や珊瑚は無機物の樣で有つて而も動物である又蠅取木と云ふ木は植物でありながら動物の働きをなすが如くで其限界と云ふ者は更に見へんからして總ての物体は同一なりと斷定して進化の度は炭素の疎密に依て異なるものであるからして人生受難きなんぞとはとんでもないことじやと云ふやうな論調である)が然らばス氏は精神界に向て如何なる斷定を下したかと云ふに元より靈魂不滅を唱導すれども其極點は不可知界なと云ふに納めて甚だ精神の皈着を茫乎とせしめて自分ながら安心をせぬと沒して仕舞つたは惜むべきであるが成程物質的說明に於ては旨く云ふてあるが精神界ときた日にや今日の多くの哲學者でもさつぱり旨目と云つて宜敷い其證據に博物學者を一見しても分る釋迦は水陸の動物を算するに億を以てし乃至十億じや然るに今の博物學者の算用は何かと云ふに其百千万分の一にも及ばずで時に地中から異樣の者が現はれると新發見じやとか何じやとか如何にも珍らしさうに吹聽するのでも其價値が知れるので誠に人間の知惠の淺薄なることは呆れる程で只耳目に感觸せぬ事實は如何なることでも皆無であると斷定をするので若しも今日

(六) 顯微鏡の發明がなかつたから虎列刺や黒死病の原因も微菌的の物ではないと云ふに相違はない又動物が夜眼が明でありと云ふことも始て云ふた所が虚言として信せぬに相違ない夫が幸にも動物は夜物が見へると云ふことは犬が夜行し猫が鼠を取ると云ふ樣な事で成程夜見へるのであるだらうと想像して信ずる事が出來たので今佛法に云ふ「人の毛髮の端に百萬の生虫が住し居る」云ふことも未だ經驗がないから信せぬに相違ないが是も顯微鏡の極精的製のものでもわつて見へると云ふと始めて成程と云ふに相違ない斯う云ふ人を指して成程人物と云ふのである世人十中八九迄は此成程人物で井中の蛙に海を語るが如くで容易に信用をせんから誠に六ケ敷其故に方便として地獄を說き極樂を說き種々の事實を列擧したのであると云ふと乍ち世人は其方便假說を知らずして有無を論じたり眞僞を議すは丁度川を渡るには向の岸にさへ着けば好いと云ふの理を退けて置いて舟の善惡眞僞を論ずると同じことで又場所方角を示すに指で示したとか杖で示したとか云ふやうなものじや示すものは指で有らうが杖であらうが手であらうと足であらうと其んなことには用はないのであると云ふことを十分に胸中に入れて置て其れから物の本体を聞かねば三文の價値もないことになる然らば現世主義とは何であるかと云に佛教には三世因果と云ふ理を立てゝ現世は過去の因により未來世は現世の因に依ると云ふことは通常の理で大根の種子は大根を生じ柿の種子は柿を生ずと云ふに同じことなれば未來の好果を得んには現世に於て善行をせねばならぬ忠孝を盡さねばならぬとしたならば現世を以て重しとする譯ではないかして見れば厭世主義であるのなんのとは大なる間違ひで山中に寺を建て世間を遠ざくと云ふのは只だ修行中のみである信者に說教するも信者の修行であるから喧噪であつては修行が出來ぬことは今日學校を建築するにも偏避な所の閑靜を撰ぶと同じことである又佛教者即僧侶は肉食妻帶を禁ずとか云ふからして人欲を制する故厭世であるとは云はれん肉食は慈悲の心を薄くし妻帶は修行を妨げるから禁じたので左もなき限りは別に制しはせぬのであるけれど大抵の人はなか〳〵制がなかつたならば決して修行が出來ぬことで古人は精神が確乎とした者が比較的に多かつたけれど今日に於ては到底夢にも見ることは出來ぬじやそれだから僧侶などは俗人よりも尙更反動的に欲が強い

(七)

のには閉口である故に吾人は僧侶の中間であつたけれども實に厭であつた偖て斯の如くであつて見れば何を指して厭世と云ふのであるか厭世であると云ふから閑靜を好むの人や修行の學生をも厭世と云はねばならん何んでも事業の成就する迄は欲を忍ぶと云ふは普通の習慣である古來妻帶を禁じたる僧侶が多いからとて人民が減せぬに反して益々蕃殖するじやて其れだから欲を忍ぶから厭世と云ふことは決して出來ません又今日迄夥多の僧侶か有つたけれども修業成就した者は實に曉天の星よりも酷しい一休和尚の樣な働きをした人は實に稀じや而して又修業成就した高僧も多くあるけれども成就したからとて妻帶をしはせぬ夫れは時代習慣と其人の精神であるして見れば厭世として取るべき點は更に無いではないか若しあると思召す人があるなら對論の煩なぞは厭ひませぬで御遠慮にや及びません故に佛敎は寧ろ欣世敎であると斷定します其じやにより て禪と云ふものも決して厭世なぞに關りはせん然るに異樣の考を起すのは丁度コップは水呑にあらずと云ふ樣なもので畢竟取るに足らん事であればそれはそれとしておくが兎角今世の人は食はず厭ひで味も知らない癖に味の善惡を論ずるも

の多いので殆んど困却である何んでも者は道に依て賢こしであるから門外漢は余り知らぬ道に喙を容るべきではない若しも强ゐて高慢らしく容れると云ふと大なる耻辱を曝さねばならぬことで加藤博士の三世因果を批難して却て茶にしられたではないか近頃も亦同博士が國民と信徒とは兩義務を全ふすべからずなどとて如何にもらしくおやりでわつた夫を明敎新誌が辨駁したけれども之も亦貴口の兒戯に均しかつた之も取るに足らぬと思ふて予は默しては居つたが忠孝の部に於て一寸論じましよ夫から色々の人が斯く云ふ樣なことが甚だ多いけれども皆門外漢であるから相手にはせねども世人が迷信しては困ると思ふたから一應は新聞にも出して置いたが又近頃大陽雜誌上にも大町桂月氏ではないかもしらんが丸で盲目の兒童的論歩のあるを見たが世間にてんなことは往々であるか今更も云ふ必要はないが何でも佛敎なら佛敎を批難せんと思たら一つ釋迦の一切藏經でも覽いてから爲た方がよい左もなくば釋迦より優等の德識を以て五ら人億萬の信者を有する地位を得て始て眞僞を論じたがよいと思ふ然るに反して其人が釋迦の文意さへも了せざるのみならず釋迦と云ふ名目さへも知らざる樣

であるとは言語同斷と云ふの外はない是の如き人の爲に釋迦が出世して五千餘卷の經をも說き畢竟の禪と云ふものを說いたのである是を云ふや則ち禪と云ふ靜慮の上からの考案である諸君が讀見するも靜慮上の現影であると云ふことがわかつたら世間毎日禪をやめて居る日はないのであるから今一層高尙優美の禪と云ふものを序を逐ふて說明を致しませう

第二章　禪學と教育の關係

智育上の關係

前に申す通り禪は思慮を靜にするのであるから雜然たる智惠を退けて純粹高上優等の智惠を得ると云ふの方法であるからして大に智育上に關係あると云ふので智を發達せしむるは体力の健全にあるとしたならば禪と云ふものが大に体力を養成するに力あるものであるが故智力發達の元素としても欠くべからざるものであると云ふことは明瞭であると同時に研究推測に要する熟思考想と同樣であるとしたならば又大に智力發達に肝要であると云ふことも明かである全体人

達磨と遊女

曹洞西有穆山題して曰く

九年面壁何のその　私や十年うきつとめ
煩惱菩提の二筋と　私や禁の一すぢを
加へて三筋で目を覺し　糸が切れたら成佛と
客の和尚のむあだ　濡女なりまと客とぬと
それあるこの古文簡　外に餘念なかりけり

の賢愚と云ふものは智惠の如何に關するもので智惠の如何は思考力の度に比例するものでわれば其思考力は乃ち沈思熟考と云ふことあるが故淺智輕薄の人物は多く喧噪であつて思考力の乏しきもの乃ち不完全的の物であるに反して思慮智識の十分ある完全的人物と云ふたらば必ず温厚篤實であると云ふに紹しても明かであるので禪を學ぶと云ふと腦力を增進し從て健全を得るが故に理として思考力の發達することでわればいやでも智惠が進歩せん譯には行かぬことであるから愚昧と云ふ事が自然となくなつて仕舞ふ事であるからして禪と云ふ者は人の賢愚に大に關係あると云ふことが爭ふべからざる事實であると斷言を憚からぬことである

德育上の關係

德育と云ふものは聯念作用と常習と動機の修研と自制と精勉と云ふことが大に關係するものでわれば禪と云ふものを學ぶと云ふと聯念と常習と云ふものが恣欲に引かされることが自然と薄くなるが故節制と云ふことが出來るからして世利に走らぬ樣になる兎角人と云ふものは世利に走るよりして不義不德をかさは

ぬ樣に立ち至るもので禪を學ぶと自然に心か高上となるが故に現世の少欲には惑はされぬ未來永遠の樂を得るの必然であると云ふことが分るから知足と云ふことを以て忍耐精勉することが出來るもので德育上の障碍乃ち惡質聯念が薄弱となり惡感化を受ることも薄弱となるものであるから惡動機が自然に沈靜するに至るのである夫れ是倫理上善惡の標準と云ふことが世間の一問題であるが世人は往々其標準を誤るからして齟齬を生じ矛盾を來たすので近頃加藤博士も太陽雜誌の上に倫理の中堅急所を衝くとか云ふて大に高言しられたが予が眼光に照らした日にや三文の價値もない然るに世人も許したか許さぬかまたは予と同觀で取るに足らぬとしられたか辨駁をしられた方がないが是が乃倫理の中堅たる善惡の標準を誤解されたからである同博士は古代野蠻の水草を追て諸處を遍歷するよりして長呑小併の戰國時代乃至今日の外交上の有樣に論究して更に倫理と云ふ者の行れ居らさるを稱し外交の原始は皆非倫非德的を以て成り立た者であれば今日外交上に德義じやの倫理じやなどとは畢竟寢言であると云の論調であるが元より夫れに相違は無きものであるけれども餘り之は局端の思想であつて夫れが倫理の起原と云ふもので倫理と云ふは同情相酌と云ふの意味であれば始より倫理があるのでもないから畢竟親密と云ふものと相伴ふのであるから今外交上倫理は皆無用であると云ふ譯にも行かず何となれば苟も交と云ふ意義を現はしたる上苟も相互と云ふ意味苟も理と云ふ字の存在する限りは德義のないとも云はれずであるから矢張り德義倫理が必要でもある一体倫理の起原は社會と云事に聯結さるものであるからして博士の論調を以て倫理の急所を衝くなどとは大に當たり損ひをしたと云はねばならぬじやて是が畢竟外交や時代や社會と云ふ觀念上の善惡の標準を誤て居るからである然らは其標準は如何であるかと云ふに局端に云はゝ人の欲が標準である又時代思想が標準であるけれども之は餘り喧しゐから換言せば人の自由を妨げざる限り人の意志を曲げざる限りが標準であると云て宜しいして見たら禪と云ふ者は知足と耐忍を知るのであるから善と云ふ方角に向ふものであるとすれば德育上の大關係は離れぬ所以で又德育の原素となるものである

体育とは身体を健全に育ふと云ふ意味であるからその身体を健康にするには身心共に安寧と云ふ事を得ねばならぬことで体ばかり滋養物を食したとて健全と極つたことには云はれぬ第一心に憂と云ふ事がわつたらなか〳〵健全所ではない大病氣である證據に戀病で死ぬ人もある樣なものであるから教育上に於ても腦髓の保全と云ふことを第一として課業の長短より体勢より常習運動位置通風溫度体操食物其他衣服睡眠靜宅と云ふことを論究するが禪學も均しく以上の事を實行するのでわつて座するが禪ではないので夫は後章に於て明瞭であるが第一心と云ふものを靜にせねば体を靜にすることが出來ず体を靜にせねば心を靜にすることも出來ず相待て靜を得るもので靜とは敢て臥た樣にするの意味ではない節度をなすの靜であると云ふことを了得せねばならぬので体育上に付ては生理衛生醫學及び禪學の方法等の章に於て委しく知ることが出來るゆゑ重育を省く爲め爰に略して置ましよう

第三章　禪學と哲學の關係

禪學と云ふものは心性作用を靜定して心体の本性を露現せしむるのであるから何しても靜と云ことが肝要であると云ふ譯は畫間は何となく世間が喧噪なるもので傍にある時計の秒音も聞難いが夜間になると誠に寂寞として微細音聲もはんに針小棒大と云ふ樣に聞ゆるが如くで心性作用の働作をなして居る中と云ふものは何となく有や無やと思ふて考の付かぬものであるから其處で沈思熟考をやらかすので漸〳〵好き考も出て來るが如くで尙一つ其の沈思熟考をも退けて仕舞て殆んど無念無心と云ふ樣に心性作用を靜めたならば始めて心体が露現するので然らば其の心体が露現したとて何の効があるかと云ふたらば其効用は云に云はれぬことは酒の味を話すことが出來ぬと同じことで酒の味は如何んと問たらば諸君は何と答るか甘くて辛くて而して斯くわると云ふた所が到底相當らずで甘いとは如何ん辛いとは何であると云ふたら何と答ふるか答ふる能ざるは必然である如かず飲より外はなしで飲まねば其味は分らんからして釋迦が迦葉と云弟子に以心傳心教外別傳と云ふたので夫を法華宗では教外に別傳わりとは魔

法である故に禪は天魔であると云ふて居る樣なもので酒の眞味を知らぬ者は好

（一六）酒家を指して何がわんなものが甘いのであるやらわんなものを甘いと云ふのは狂言であると云ふやうなもので飲まぬ人には話しが出來ぬじやて禪をせぬ人にも禪の話が中々六ヶ敷で困り入るのであるが其効用は効用の章に於て詳論するとしやうが夫れ酒の味ひが飲まねば分らぬから飲で始めて知る故に心を以て心に傳へた如くであるから教の外に別に傳ふと云はれたのである教は經文の如くである乃話す事が出來ぬから教外と云ふたので法華宗などでは釋迦が法華經を說く時に四十餘年未顯眞實として今迄で四十餘年も教を說たけれど未だ眞實の事は說かぬ今說く此の法華經ばかりが眞實であると云はれた言葉を取りて餘經は皆虛說として居るのでこれは大に誤解と云はねばならぬ何となれば假令以前の經說が假設や虛言にした所が眞實の經を開て解することが出來たのは皆假設の經の力に依りて得たもので丁度吾人が一人前の人間となり自由に獨歩することが出來たとて父母の力に依らぬは無い皆父母の餘澤を受て生長したのである然るに法華宗の如く法華經獨り眞實で餘經は虛であると云ふのは大に不孝者と云はねばならぬ吾人は父母の力に依らずして生長したと云ふが如くで誰か之を

法華宗の妄言

孝なりと云ふものが有ろふや又二階へ登るに梯子を用ひながら梯子は無用なりと云ふ樣なもの又河を渡るに舟の力を借りながら舟は虛なりと云ふが如くで誰か其愚を笑はざるである實に法華宗は一を守り二を知らざるもので其時の事のみを執り捆まへて前後を忘却したものである前を忘却したと云ふのは今云ふた通りで舟や梯子を無用と云ふ如く後を知らぬと云のは釋迦が法華經を說き了りて終に四十九年一字不說とて初の四十一年は諸經で後の八年は法華經を說いて居られた年數で前後合して四十九年の間一字も經を說たことはないと云はれたので說いたことのないと云ふは皆眞實にわらずと云ふの換言であるからして法華經も亦其時に於ては方便假設の經と定つたのである然るに法華宗はそれを知らずに威張つて居るのは丁度孔子の所謂小人を見ること其肺肝を見るが如しと云はれた樣なものである其故に以心傳心など云ふ樣な甘い酒を飲んだことがないから痩我慢で天魔などゝ云ふのであるが淺ましき次第である其の以心傳心と云ふのが禪を云ふたので言語に盡せぬからであるして見れば釋迦の四十九年間

（一七）の說教は禪の一字に納まるので四十九年の横說縱說は禪と云ふことを了得せし

國武先生の禪

(一八) めんが爲の方便であるからして佛教と云ふものは禪の外に一物もないので又禪を一つ貫いたらば八萬四千の經說も皆掌中にある樣なものであるゆゑ禪をさへやれば別に佛教を學ぶの必要はないことであるそれで今日の哲學と云ふものも皆禪と云ふ理に歸入せぬはないので實に禪と云ふ者は驚くべき弘ゐものである それも有る筈で五千餘卷の經中には哲學理學博物を始として所有の學問の非らざるはないので已にX光線の事や電氣瀛車に至る迄解釋を下してある然るに夫が世人の知らぬと云ふは經卷の多數と理の難解とに依て開發しなかつたのである歐洲の文明も多くは印度より輸入したと云ふこと亞歷山大王の事蹟等に徵しても一般學者の是認する所であると云ふを見ても思半ばに過ぎんと云ふよなものであるから之を哲學に比較したらば純正哲學と云ふても宜敷がけれども哲學の樣に皈納的研究と云ふではなく寧ろ演繹的研究の方であるから黑白の關係を離れぬ譯でわるが渡邊大臣が嘗て禪機と哲學と云ふ書を公にせられたが之は只哲學諸大家の思想を以て禪宗中の臨濟宗の得意とする四喝と云ものを比較したもので禪機と哲學に橋梁を掛けたと云はれたがどうも不完全で仕樣がない却て

井上博士の禪

初學を誤るかも知らん其四喝と云ふを一言しましよふ喝と云ふことは別に意味のある譯でもないが唯勢を示すの手段であると思へば間違はない第一の喝と云ふのは

人を奪ひ境を奪はずと云ふので哲學で云ふたなら唯心論と云ふても宜しい人は心で境は物質であると思て宜しい第二は境を奪ひ人を奪はずと云ふので唯物論の樣でわる第三は人境俱に奪はずと云ふので物心異体二元論と云て宜し

第四は人境俱に奪ふと云ふので之は理想論と云ふて宜しい

それで始の三喝は方便初門であつて后の一喝が眞實であるが成程四喝は哲學上の比較的都合が宜敷ゐが禪と云ふものはこんな四喝の樣に言語を以て比較現顯の出來るものではないのでそんなら現せしむることが出來ないからとて六ケ敷と云ふ譯でもない又臨濟先生じやとて四喝を以て禪の本分としられた譯でもないのであるけれど初門として置けば差支はないが渡邊さんが是を以て極致の禪として居られるならば御氣の毒と云はねばならん又井上博士が禪宗哲學と云ふ

(一九) 書を著はされたが之も禪宗を以て哲學と混同視される人も無きにしもあらずで

あるがして又博士の考えはいざしらずとして置いて余り申しませんが併し禪宗を以て心理學上意志宗であると斷言しられたるに至つては予等は大に不感服である何となれば禪と云ふものは具体的のものであつて別々なる抽象的ではないのである成程意志を靜めると云ふ点に於ては意宗であるかもしらんが其目的と云ふものは心体にあるものとしたならば區別的の意味耳には關らんことで寧ろ心理學上の心性作用を斷じて心体露現の目的であつたなら純正哲學と云わなければならんのである去るにも拘らず意志と斷言されたるは先生未だ禪之禪を了得しられぬのであるかと云ふの考を持たんければならんので純正哲學と云ふものも諸學の原理原則を論するのであつて物質的原則に有つては畧ぼ出來てあるけれども心体と云ふ点に付ては不可知的界に属して唯だ心性の現象を以て心体を假定する迄で到底人智を以て測量すべからざるものとしてあるからして生死の自在を得る事も出來ねば生前死后の狀態も知ることの出來ぬ譯であるから天狗や幽靈の解釋も出來ず只耳目に觸れざる限りは無ねとして置ねて偶ま見るものがあると其れは病理的心性の作用であるとか神經作用だとか云ふことに托して通れるのである實に想像力の概念に乏しねのと未經驗的の抽象觀念の乏しねのには驚くの外はないので古代も懷疑學派と云ふが有つたそをじやが今日も殆んど懷疑の極点で人は盗人に翌日は雨と云ふが如くじや人情の墮落であるからどうも救ふに法なしじや到底吾人の様な馬鹿者では仕方がない何を云ふても聚耳に水や馬耳東風も世の習やいやそうではない信用せしめる丈の力がなねのじやそれだからして此不可知的世界に向て明瞭ならしめるのは禪の力より外にはない然るに其禪をもやる人が少いからして哲學や教育じや醫學や生理と云ふものでも比較をせねばならぬ有様となつたも時節到來じや

第四章

禪學と生理醫學上之關係

生理醫學衛生などは体育と密接の關係があることは已に知らるゝ通りであるが然らば禪と云ふものは何故に關係があるかと云ふに乃ち后章に説くが如く禪の方法に依りて行ふときは第一身体を正直にして節度を保ち腦髓を適宜に養ふと

云ふのであるから心身共に安寧となるものであれば理として然らしむることで

思慮を靜めて体を安全に置くときは腦中に攪在する所の惡血的物質が自然と腦中より排出されて脊髓を傳ふて下降するので其際に於て生理的作用によりて体外へ汗の如くに漏泄すると云ふ事は爭われぬ事實であるから從て身体に惡血の滯留すると云ふことがおくなり精血の逝還のみとなるから腦中には惡血的の沈澱物が無ゐ樣になるのである腦中に於て惡血的物質が無くなつたならば頭痛のすると云ふ樣なことがなくなる其故腦が健全となる腦の健全は畢竟心身の健全である心身の健全は教育上の發達を助くる大原素である全体人の賢愚と云ふものは前にも申す通り腦髓の精粗如何に拘はるもので智力の優勝あるものは乃ち腦の健全と云ふを意味されてゐるのですからスペンサーの云ふ如くで動物の階級は炭素の純雜疎密精粗の組織如何に拘はると云のであるから最高等の動物となるに從て炭素的腦髓組織の精密の度を増すものでわつて世界生物一として多少炭素を有せぬはないのであると斷言されてゐることであれば禪學をなす時に於ては又其通り腦中に純粹の精血乃ち純粹の炭素的物質を吸集して非純的炭素を体外へ驅除すると云ふ理であれば自然に腦中の組織を密ならしむる譯で智力

觀念を貯藏するの量が廣大とあるので嘗て曹洞宗の原坦山と云ふ人が(近年沒す而て此人死期を前知せり)惑病同原論と云ふことを主唱されたが此人は永く醫者で有つたが佛敎の理を或人と爭ふて遂に禪門へ投入したので其れから一生懸命に禪學に骨を折り遂に極を貫ぬた人であるが其の主唱する所は名の如くで惑とは迷である愚と云ふことである智慧不足と云ふの意で此の人間の愚と云ふものと病と云ふものは其根原起因を同ふすると云ふので前述の通り腦中に惡血的物質の增すに從つて病を增すと云ふことは今日醫學上の是認する所で病を增すと同時に自然智力を減じて愚に近寄るに至ることは病により記臆力を減じたなどと云ふ事に徵しても明かる事實で腦の健全は智力を增すと無病になるのであるからして禪學は腦の健全を養ふものであるとしたならば大に醫學生理衛生上の一大關係を有すと云はねばならんので例せば河流の水の濁りたるときは之を清まさんとするも容易でないのに反して靜定の濁水は早く清むと云ふ樣なもので之を以て喩とはなすに足らざれども禪も亦喧噪の河流に於ては惡血の粗濁物が容易に落着かぬので喧噪を一つ離れて靜寂にしたならば自然に沈澱して体外へ

逃げ去るものであると云ふことを了知したらば大に禪學の効用を知ることが出來ます夫故に病と愚と云ふものは正比例をなすものであれば此禪と云ふものは両全を得るの良策と云はざるを得んと云ふようなものであるが世人或は云はん學者多く病に冒かされて死すではないか予は大に此の疑問を待つて居たので夫れ學者の多くは唯智力の養生のみに力を盡して智惠を貯藏して置く器械たる身体の養生を誤つたからである若しも禪學の如くに両全的に養生をしたならば決して學者の病に係る事はないので現に予は大學者であるけれどとんと病のなゐのに閉口して居る位で之が所謂禪の効能であつて已むを得ん事であるゆゑ若両全を得んには禪學をやるに如くものなしと斷言します所が又世人或は云はん体力甚だ健全であるにも拘らず愚であるは如何假令狂人や白痴の如しと是又大に云ふべきことがあるが矢張り始めの事と正反對であつて白痴等は元來の不完全的の腦髓を固有して生れ出でたので生盲や啞の如くであるから草木の生長の如くで不具は不具なりに生長するので腦の規則を外れたる所の度外的物質であるから況して心に憂と云ふものもなければ心身安寧の極に居る故生理的病にあらざる限りは或病同原的の病はないもので又狂人なども云ふものは精神が或る熱望的注意力により頓に變化した迄のものであつて体力の如何には生理的の外は無關係であるので其の純理的精神と云ふものが潛勢した迄の者であるから或る方法によりては治療の出來るものであるが之は醫者の關係であるから予等の門外漢が容喙すると失敗を來たすから禪學の上から一言した迄のものであるが兎に角両全の方と云ふたら禪より外には先づなゐ禪と云はゞ總ての教育上價値を有するからである

第五章　禪學と忠孝の關係

禪をやると知足と安心と云ふことが出來る故大に世上に立つにも起ちやすいから忠孝も遂げ安ゐ譯で知足と前述の如く自の分限を知る事で臣は臣子は子と國民たるの義務を知ることである安心とは心が安樂であると云ふので總て宗教上に於ては一大原素とされてゐる夫で安心とは何であるかと云ふに我一身上に於て憂と云ふことのない意味で諸君が種々の困難を忍耐して勉學をすると云ふも

皆な勉勵をなさば必ず目的を達することを得て世間に用ひられ且つ名譽を博するは必然であると云ふことを安心して居るからである又戰場に向ても一身を犧牲に供して原田重吉先生の如く雨丸の危を冒すと云ふも君に忠を盡し國に報ふべきが本分であると云ふことゝ國民の名譽且つ我一身眷屬の名譽であると云ふことに安心をして居るから人の肝膽を寒からしむると云ふよな働が出來たのであるして見れば何事をなすにも安心と云ふことを欠いた時に物の成就すると云ふことはないものですから安心は即忠君報國孝親義友と云ふことの一大要素である夫故に安心は義勇である勉勵である忠孝であると云ふ所以で安心のないものは不忠孝で不義勇で怠惰であると云ふて差支はない換言せば安心と云ものは忠孝の爲には身命を惜まんと云ふ意味である身命を惜まぬからして大功を遂げることも出來るのである故に禪を學ぶと云ふと心体の根源と云ふものが分かるからして生死の規則などには支配されぬして却て生死を支配するの權利を握得することが出來るので古來禪を學んで極に達した人は皆生死を自在にした例が澤山ある原坦山其人の死期を知つたと云ふも其一分子である(但し醫學的に於て

は別段の事茲には禪學のみ)其例證は后章に現はれます併しながら通常の人にして夢中に死期を知るのも往々あることで是も矢張り禪の一分である夫は何であるかと云ふに或る病氣とかゝると精神が專一に生死の事を思ひ込むが故に凡の心性作用を靜定して心体の如何が暗々裡の夢に於て自得することが出來る樣なもので畢竟禪も此の通に行けば宜敷いのであるが兎に角安心と云ふことは何に付けても必要であると云ふことが分れば其安心は即ち禪に依て養成することが出來るものである故禪が忠孝と云ふものに甚必要であることは當然の理である夫で又身命を惜まぬと云ふ安心とは何であると云ふに禪は生前死后の狀態を推知することが出來るからで凡そ人間に生れ靈魂不滅と云ふことは一般哲學者の多く是認するにも拘らず生前死后の有樣を推知することの出來ぬとは誠に憐むべき狹量であると云はねばならんので僅か五十年位の生命を以て足れりとして永遠の狀態を想像することも出來ぬは人間の人間としての價値のないもので犬や猫と同然であつて万物の靈長とは云ふことの出來ぬ譯である人面獸心と云ふも亦此一分である云ふて差支はないして見たら人間に生を受た限りは此邊の所を

知らいではあらんでないか又忠孝も盡さねばあらん然るに此安心と云禪がないと同し忠孝を盡すが如く見ゑても其結果に付ては甚だ差異のあるもので丁度一部書物を讀むにしても其通り只字義や意味を考ゑる丈の事は差異のないものであるが其書の意義の由て來りし所以と云ふに至つては唯表面的で讀んだのと眞實的に讀んだのとは同じ讀みながらも格段の差異あるが如くであるから同じ忠孝と云ふ点に至つても亦そうである故に安心と云ふことが是非とも必要であると云ふのじやが茲に局端論者ありて云はん身命を惜まずとしたならば飢餓に迫るも何の死を恐れん遠慮なく速に死するであると是れ大なる誤りで人間の本分を忘れての話しである安心が出來て死する位なら安心の用はないので安心を應用して世間に起ち自他を利益し忠孝を盡してこそ安心の本分人間の本分と云ふなれ何をして是で完全的人物であると云ふことは出來ぬことじや楠正成が湊川に戰死したのも皆是の安心じや其戰死する前にも兵庫妙嚴寺と云ふ寺の住持に向つて生前死后の狀態を問ふて安心した話しもある又相州小田原にも一名不見と云ふ士がありて甚だ勇悍であつた故ゑ人が尋ねたら答て私はほに三度死と云

加藤博士の安言

とを考へると云たそうだが其死と云とは安心上の死と云ふとで死を恐れぬと云ふ死を三度考ゑるとの意味であるが大石良雄が死に處したるも世人は只武士道のみで死んだとして居るが佛教的の觀念が中々有つた樣子じやこんな例は澤山で筆紙にはさ盡れん上杉謙信武田信玄亦禪僧に付て究めたことが甚だ多い戰に暇さゑあれば禪に餘念なかつたそふじや太田道灌と云者も一寸面白ゐ元より反逆者ではないが上杉定正に仕ゑたもので道灌を殺せよとの命を受け定正の從者が槍を以て道灌の入浴場へ飛込で責かけたら道灌一首の歌を讀んだ「さこそ命も惜しからめ豫ねて無き身と思ひしらずば」と是れも入道ではあるが甚だ禪味安心の具わつたものでわつたそうなが大抵禪と云ふ者が忠孝に關すると云ふことは安心と云ふ点に於て最早明瞭である茲に總論に一寸云て置た加藤博士の事であるが面白いことを同博士云はれた國民の國君に對する義務と宗教信者が宗祖に對する義務とは矛盾齟齬であるから一人にして兩義務を全ふすることは到底出來ぬ夫は何であるかと云ふ今宗祖などは何宗にしても弓矢刀槍乃至戰爭などは大禁物として居る所が今國君に於て不義戰の戰爭でも始められると云ふ日には

國民の義務として戰爭に從事せねばならんが戰爭其物が正きに非ざるのみならず而も不義戰爭であつたなら尙更禁制であるとしたならば國君に從はんか宗祖の敎に背き宗祖の敎に從はんか國君に背かねばならんして見たら一人にして兩義務は全ふすべからずと云ふにあり然る所予輩が眼光では是亦三文の價値がないのである明敎新誌がこんなことを辨駁が出來なんだか佛敎諸雜誌が知らなんだのかしらんが若しも佛敎諸雜誌が矢張門外漢の所論であれば三文の價値が無いとし論じなかつたのなら宜しいが然らば明敎誌も云ふた丈け野暴であつたかもしらんが兎に角門外漢とした所が世人を瞞着する丈の價値を有する人物の所論であるとしたならば默許する譯には行かんではないか故に贅言ながら一寸申して見ますが他宗敎はいざ知らず佛敎に於ては決して矛盾はしません何となれば佛敎に於て四恩と云ふことを尤も重しとするので四恩とは國王の恩父母の恩國民の恩法の恩である其內國王の恩を以て就中重しとするので何とならば國王の保護と云ふものが無かつたならば父母が有ろが國民がわろが法律がわろが何の用に立つものか其證據に殷の紂王夏の桀王の時如何で有つたか國王の威光と云ふものは實に無比であるして見たならば國王の命である以上は我身命よりも重きである我身命は國王の意中にあればありであるからじや其國王の恩の重きを佛敎上の大義として居るの然云ふと云ふ人あらん佛敎は佛を至尊とするに非すや何ぞ王を尊とするやと是一を知つて二を知らざるの言にして佛は精神上に屬し國王は身体上の至尊である假令精神の如何を論せんとするも精神器たる身体なくばなにかせん之れ精神上に至尊を立つる限り尙更身体上の保護たる至尊を必要とする所以であれば云ふに足らざるの所論である斯く云ふたならば博士等は嘸ぞ云ふで有ろう然らば不義戰にも從事すべしと云ふ經中に明文ありやと云はん之れ殆んど兒戲的の所論で明文の有無は兎に角國王の重恩と云ふ限りは命に從ふと云ふが恩に報ゆると云ふので其戰が不義であろと正義であろと頓着はいらぬ命之れ從ふじやそふ云ふと又出るじやて然らば國家の危を見ても不運あるを知るも默して命之れ從ふと云ふか義不義幸不幸をかまはぬのであるか之れ國賊と同じからんと云ふに相違はないが是又大なる誤りにて者の節度分限を知らぬ口調である何となれば國民として國の不利を見不幸を聞き危を知らば誰

か之を告げざるものわらん不義と見不利と知らば及ばん限の力を用ひて呵王に諫言を奉せんのみ聽入事なくんば己むで命之れ從ふのみ事に於て何かわらんしや夫れであるから又明文がないから宗祖の敎に背くと云はんが如きは丁度三と七と加ふれば十となるの理を應用するを知らずして四と六とは三と七とに大なる異わりと云が如し實に博士とも名の付くものでそんなものかと思ふば吾輩は大博士じや其んな法螺は兎に角涅槃經の中にも護法の爲には刀戰弓矢をも持すべしと云とがある假令國家が不義であるとした所が宣戰の詔勅があれば己むを得ぬじや我命を保護される至尊の命であるから諫言の容れられざらん限りは從わずんばあるべからずで若し從わんとすれば國王の恩に背くのであるから國賊である國賊であつたならば國に容れられないもので身命も其限りである身命がないとしたならば佛法の修業も出來ず況して我生死を自在にする事の出來る筈はない然れば不義戰であろふとも命に從ふが即ち國王に報ゆるので又我身を保護するので身を保護するのが法を保護するのであるから涅槃經の明文は是で〻分である然れば博士の所論は半文にも當らぬと云ふことになり了つたのである

から最早や土中に葬つたのと同然である

涅槃經金剛壽命品ノ中ニ善男子正法ヲ護持スル者ハ五戒ヲ受ケズ威儀ヲ修セス刀劍弓箭鈇鋸ヲ持ノ守護スベシトアリ

第六章　禪學之効用と必要

功用と云ことに就いては畧は前述の事に依て了解されるではあるけれど其項目例擧して見よなら先づ左の通りである

一思慮を緻密にする事
一耐忍の力を養成する事
一膽力養成に於て特効わある事
一智育上德育上体育上に於て大効力を有する事
一衛生上に於て有効なる事
一精神を爽快活潑おらしむる事
一恐怖心を驅除する事

一病原を斷絶する事
一忠孝心義勇心を養成する事
一喧噪の者をして篤實ならしむる事
一宗教の安心を得せしむる事
一人間の價値をして高上優美ならしむる事
一迷信を除く事
一慈悲の觀念を發達せしむる事
一知足の心を養成する事

尙ほ數ふるときは枚擧に遑あらざれども多く此中に皈入するものであるが斯の如きの功能があるとしたならば其必要であると云ふ事は今更論ずるの必要もないが人間と生れた限りは人間である中に生死の自由を得ねばならんので何時も人間に生れるものであると思ふたらば大なる誤りであつて靈魂が不滅である限りは何にかに生を受るに相違ないスペンサーの如く進化論を以て來た所が彼は物質的進化で有て其物質的觀念の靈魂不滅であるから生前死後の狀態は非物質

的の物であるから分らんのであるが佛教では進化のみならず退化論もある善は進み惡は退くと云ふので同じ人間と云ふ種子でも腐敗した種子は肥料を與ふが日光の當りを好くしようが到底其功はないので后には腐敗類質の土となり了るので種子が好ければ必ず發芽生長をする樣なものである其種子と云ふものは日々の行爲と云ふもので其行爲の習氣が靈魂に感染するから一度感染されると非常の良藥を用ひねば拔けんものであるから惡習氣乃ち惡習慣を感染させぬ樣にせねばならぬであるが其靈魂の滅不滅に付ては大に疑を懷く人も有るふが夫は古より今日に至る迄有り觸れたる例に依りても不滅であると云ふ事が分からねばならぬ譯で莊子列子などでも此に死せば彼處に生るとも云ひ孔子でも鬼神の德たるなどと云ひ或は武王が文王の廟に祈りて雨を請ふて驗ありし事日本に於ての神社を祭るに於ては大に關係あるもので神社の多くは人の靈を祭りたるものであるにも拘らず祈願などをするにも其靈驗ある事殆んど限りのないことで肥后の清正の例などは特別なる驗がある予等も大に迷信と思ひながらも感伏をしたことがある多くの世人は祈願などをすると忽ち迷信じやと云ふが之れ又迷

と云ふ字義だも知らぬので功能の無いこそ迷信なれ現に功能の有ると云ふに至ては迷信とは云ふべからざるのみならず悟信と云ふべきである幽靈や天狗や餓鬼なども其通りで皆確乎として有るもので無いと云ふ者は知らぬのである分ると云ふと必ず成程と云ふに違いないので先に云ふた成程人種である大抵の學者が皆そうじや然らば古來多く幽靈を見た話があるに今日に於て何ぞ見ることの少なきや之必ず世人が古時に於ては未開の故に見誤りをしたので幽靈などではあかつたのであると云ふに違いないがそふである人智開明となる以上は幽靈とある人物も從つて違ふものであるが又近頃では幽靈でも人間を瞞着する事が六ケ敷いから現はれんのであるかと云ふにそふでもない是に付て中有と云ふことを說明して天狗餓鬼等の事をも詳說せねばならんことで人間の行爲事業から說き及さねば中々分るものじやない其のみで百ページや二百ページの紙が入るから小冊の說き得べきではないそれで假令其事が十中八九無いとしたところが古來死したるものが蘇生し或は其妻子眷屬に話をしたと云ふ例證は三國因緣談や支那の古事類書等に就て見たならば疑が晴れるである又近來靈魂不滅論等と云

書物も出て居るが一應は見る價値もあるから凡の說を見聞して信ずべきである又聖德太子傳の心と云書にも太子自ら委しく前生の事歷を說いて靈魂不滅を現してあるが何れの靈魂不滅論を見た所が其云ふ所皆小事實に過ぎないのである からとて是も致方がない徹見の眼がないからである夫れであるから愈々禪の必要が起るので禪と云ふも唯其体を明むる事が出來れば先づ好いのであるが中々分からん已むを得ず南無阿彌陀佛と云ふより外はなかりけるじや白隱禪師と云ふ人も云ふた坐禪も結好じややつて見た所が尻が腐る所か足が痛ふて堪まらぬ無念無心どころじやござらぬ三年以前に隣へ貸したる黑豆三升思出して忘られぬなぞと云はれたがそれだからなむあみだぶつの外はないじやと云ふのじやがいくら禪じやとて俄に行くものなら誰れも困みやせぬ唯平常に行い居れば身心の安寧より種々の効果に依りて積んで山をなさしめるのであるじや其中甘い事が飛んでくるのであるから其好時節を待ちつゝ行ふことであるが其の南無あみだと云ふも畢竟靈魂不滅を言ひ現したる語であるが譯すると歸命無量壽如來と云ふことになる歸命とは吾人靈魂の根本と云ふが如くで其靈魂乃ち心の根本は

無量壽であると云ふので無量の壽命であるから不滅である如來とは心の本体は人間や動物の生を受け來るべき者ではあけれども心の善惡如何に依りて生れたるものであれば眞實來るべきでないから來るが如しと云ふのじやそれで總して云ゑば不滅の靈魂が假りに來た迄と云ふ意味で南無あみだ佛と云ふことは心の解釋に過ぎないのであるから南無あみだ佛と云ふ代りに心心心と云ふも同じ事じや靈魂不滅と唱ふるも少しも違いはない何んでも佛敎は原語あり用ゆるから誠に六ケ敷い又且那樣と云ふた所が何が且那やら知らん且那は印度語で譯すると施主と云ふのであると云ふと成程じや夫だから門外漢では價値がないと云ふことじや餘計なことを饒舌りましたが何んでも釋迦が出世して八万の法五千余の經を說たのも靈魂不滅であるから靈魂の本源と歸着を知得せしめて生死の自由權を握らしたいと云ふ慈悲の心より外はないのは丁度日本か憲法發布以前には人權が未發達で在つたのを憲法の發布をあされて人民に自由の權を與へられたと同じ事である然るに生死自由の權を有しあがら生死に妨げられ病魔に冒されて生死自在どころか身心の自由も得られんのは禪と云ふ者をやらぬからであるして見たならば早くも禪學を修めて生死を左右し生死に左右せられてはあらん仮令物質的進化を論究したとて生死の自在は得られぬことは古來哲學者として一人でも生死を自在にしたものがあるか如何然るに佛敎の禪達の者に至つては多くは生死を左右したもの耳である聖德太子も前生支那の名僧であつて日本の太子と生れるにより觀世音の像を海上より日本へ送れと弟子に遺言して日本へ誕生せられ中年の時淡州に下られて海上より觀音の像を拾ひ玉ひ京都に於て六角堂を建立せられたる事實は六角堂由來記に依りても明白である之も靈魂不滅の致す所で生死の規則を自由に使用された一例であるが其例等は甚だ多くあることで斯の如き自由の權を得んには宜しく禪に依らざるべからざるでないか仮令其丈の自由を得られんとした所が前述の如き効用のあるにしても損をすると云ふの事實はあいから學ぶに如くはないして見れば益々禪の必要を感する所以である(六角堂の觀音の像は丈一尺二寸にして高麗の光明寺の者なりしと)

第七章　禪學之快樂と目的と結果

パーレー万國史の口調ではないが汝等風船に乘りて旅行するで有ろふならば山や溪や川や町を見下ろし甚だふくわいにいで而して愉快を感するで有ろうと云ふのと同じことで今諸君等が一層高上なる禪學と云ふ風船にのり精神界を旅行するで有ろふならば種々なる人間や畜生や及異生の有樣と精神を見下ろし甚だ面白く愉快を極むるで有ろふじやて其快樂を知らなかつたならば人間の人間たる價値と靈長たるの資格を有せんと云はねばならん實に禪の快樂と云ふものは普通人間の測知し得べきでないから人間の所作を見ても可笑て堪まらんことがあるとさ其は其のはづで人間の智惠と云ふものの淺薄なることは井中の蛙よりもじやて僅か一地一世界の研究にさゑ汲々たる有樣であるから禪眼から見たなら譬も足らないで有ろふ禪眼と云ふものは三世通見とて過去と現世と未來との三世であるが過去と云ふても色々あるが一抄以前は過去で一抄でも以后は未來で現在と云ふものは一抄時間もないが其三世のみではなく數へ盡されぬ程の前后の時間に向て現在の如く徹見するの眼であるのだから面白いに相違はないじやがしかし世と云ふことも知らぬ人が多いから一寸申さふが世と云ふは流れ遷りて際限のないと云ふ意味で乃ち天地万物の變化極りなきを云ふたので所謂無常と云ふことである無常とは今あるとも何時空しくなるやら無くなるやら知れぬことで今日安全であるとも明日死するやら實に一秒間の生命の全きを期すことは出來ぬことで、一寸先は闇夜と云ふ如き人間の眼識はそんなものであるから一日も一分でも氣が付いたから早く安心と云ふことをして置かねばならぬことじや死んで未練が殘るなどと云ふ樣では到底明かぬから何時死すとも少しも憂ふべきことがないと云ふ樣でなければ人間の詮なしと云ふものである其憂の殘らんと云ふ樣にするには禪と云ふものに因りて三世因果の理を究知すべきである一つ禪眼を得た日には三千世界も掌中にありで地獄餓鬼畜生人間とか云ふ凡ての世界を一見の下に知り得ると云ふのであるから是程愉快はない又生死の自在を得た日には聖德太子の如くで國王であろと大臣であろと自由自在じや實に愉快極るではないかさゐ其愉快なる事があるのにも拘らず禪と云ふことをやらんと云ふことのみで無く知らざるのみでもなく名をも聞かぬ者さゑあるは致方の無いとは云いながら現在釋迦が說いて有るものをじやて釋迦の目的と云ふも

唯是一つで何も外に望みはない何ふか此快樂を群生に得せしめたいと云ふの一心である其目的が生死自在の權利で結果は人々の望み通りじや之が乃ち生死自在の應用であるが禪にも種々の禪がわれば目的結果も甚だ種々であるけれども最上の目的結果と云ふものは生死自在の處置である其生死自在を得たならば其愉快果して如何人生僅か五十年であるから人の根機の鋭鈍により得るもあり得ざるもありだから假令今生得ずと雖とも一度禪學に足を蹈込んで置けば身命を換ゆると雖ども其萌芽を顯はし遂には成功を得るものであれば何でも人間と云ふものは氣を長く以て行かねば大事業の成就は出來ぬから今生で出來ずんば次の生じやけれども得能ふ丈夫丈けより多くやらずんば後生期し難きじやに因つて此身今生に行はずんば更に何の時を期せんと云ふの考を以て行はねばならぬことである

第八章　禪學之種類

禪の種類を論ずる日になると殆んど數なしではあるが先づ云ば如來禪であるとか祖師禪であるとか世間禪じやとか出世間禪であるとか外道禪小乘禪大乘禪最上禪至乃禪着話禪軌轍禪遶路禪直截禪などに限りはないが大低は皆こんなもので一々解釋も不要であるから畧しますが達磨の禪は祖師禪として最上禪で智解學問も何もいらぬ直に本心を悟るのであるが是が一番宜しい

如來禪と云ふは空無想と云ふ心になり悟を得ると云ふ禪定で釋迦如來が王宮を出で檀特山に入り阿羅々や迦闍の二仙人の許にて水汲菜摘薪を荷ふてやつたけれど別に功用も見へぬゆゑ雪山へ分け登り菩提樹と云ふ木の下に六年が間坐禪をして十二月八日の曉に明星を一見して何か氣が付いたと見へて大に此道を悟られたので師匠もなければ自ら發得した禪であるから之を如來の禪と云ふのであるが又其に付て緣覺禪と云ふものもあるが之は小乘と云ふて下等の禪である之も十二の因緣と云ふことを觀念して飛花落葉を見て山中に坐禪をして悟を開くと云ふのであるがこんなことは吾人には用はないとせねばならん夫れて小乘と云ふた所が分らんから佛敎上の用語であるから一寸話さふ今迄種々の書物が著されてあるけれども皆佛敎の用語ばかりで分りかねるからついでに少しも佛語

を用いずして說明をしませう小乘とは小さき乘物と云ふが如くで大乘と云ふて大なる乘り物と云ふに對して云ふたので小さき乘物とは眞實の佛敎でなく方便假設の敎と云ふようなもので悟と云ふ內に入る門である事は丁度二階へ登る梯子や川を渡る舟の樣なものでおる大乘と云ふのは二階や向の川岸と云ふのと同じことで彼岸と云ふのは其ことである彼岸とは佛の悟を云ふので小乘は此の佛と云ふ悟を得ぬ者である故に小と云ふじやが日本では只今は小乘と云ふ宗旨はなけれど大乘の中にも頓と云て速に佛となるのと漸と云ふて漸々に修行して佛になると云ふの二つで頓敎と漸敎とに分れてある禪は乃ち頓敎である眞宗淨土等は漸敎であるそこで又十二因緣と云ふのは人間と生れるには十二原因があると云ふので其原因を斷切して再び人間の樣に苦勞の多ゐ者には生れぬと云ふの主意であつて佛にはならずと人間や他の動物に生を受ぬ樣に務めて居るので其十二の原因とは左の通りである

受生十二原因

(第一)無明＝是は煩惱と云ふて愚痴と云ふことで迷ひと云ことである人間や他の生物は眞の道理を知らぬ迷ふて居るから苦しゐ處の動物おんぞ生れるゆゑであるから其迷を斷つために修行をして其人間に生れる原因の道を考へるのである

(第二)行＝是は迷て居る故迷の行をおすから人間に生れると云ふので迷ふから種々の行爲があると云ふこと

(第三)識＝是は意識と云樣なもので迷ひて行をするから識と云ふ靈魂が人間の父母に愛情を發して男は母を慕ひ女は父を慕ひ男女の交接に乘じ母の胎內へ入ると云ふ場合である

(第四)名色＝是は靈魂が始て胎內に入り父母の精液乃ち男子の炭素的精虫に托して女の卵子中に入て懷胎と云点に至りたる場合にて形の始と云ふが如くじや

(第五)六入＝是は五官と意識を云ふので胎內に入りて漸々生長して眼耳鼻舌身意と云ふ感覺意識の備はつた場合じや

(第六)觸＝是は最早分曉して四五歲迄の間で火の熱きを知らず水に溺るゝを知らず唯觸れると云時である

(第七)受＝是は十二三歳迄の間で何んでも身に受け感すると云ふ時である

(第八)愛＝是は物を愛すると云ふのであるから十四五歳以后の有様を云ふ婬欲等を發起する時からである

(第九)取＝是は愛するものを取ると云ふので取て飽ことを知らぬと云ふ有様で欲の爲に勞を厭はずと云ふ場合で二十歳以后なり

(第十)有＝是は未來世に必ず生を受くべきことが決定して有ると云ふので愛取と云欲により種々の行をしたから其が原因となりて其行に應じて人間や畜生の生を受くと云ことである

(第十)生＝是は乃ち今世の身命終りて來世に生を受たと云ふことである

(第十二)老死＝是は生れたから年を取て老て死す迄を云ふたので其の死す迄は又第三から乃至第十迄の有様で生れては死し死しては生れ循環極りないと云ふことを云ふたのである

それであるから愛取と云ふよな欲を斷つたならば最早人間に生れたり畜生なぞにも生れぬ所の生死自在を得る靈魂世界乃ち精神世界の仲間入りをして快樂極りなしと云ふのであるから小乘の者は坐禪をして此事を觀念して欲を斷つので十二因緣を觀じて人間の生を受くる原因を悟ると云ふから緣覺禪と云ふのであるが是の禪じやとて中々結好甘いことばかり云ふけれども此の禪でさへも出來る人は今世おいことである

それから聲聞禪と云ふものもあるが畧ぼ同じ樣で矢張小乘であるが聲聞とは聲を聞くと云ふことで聲とは說敎とか經理の聲を聞と云ふので即ち敎理を聞て人間や他の生物の生を受ける原因を悟つて其原因を斷じて生を受けぬ樣にして精神世界の仲間入り爲ようと云ふのである是も亦結好じや次でに一寸說明しよふが是も四諦と云ふことを立てゝ其生を受ける原因を諦らめ覺るのである四諦と云ふは諦とは審美と云ふが如く四つの實道である

(第一)苦諦＝苦とは人間や生物の世界は實に苦である何時死ぬか分りもせず何時世界が崩れるやら變化があるやら危ぶおいことは虎狼の傍に臥て居るが如しであると云ふこと

(第二)集諦＝集とはあつめるとて人間や何ぞは常に種々惡行をおし罪惡を造るも

のであれば之が因となりて苦諦の苦しい人間の樣な果報を得るのであると知るを云ふので

(第三)滅諦＝滅とは無くすると云ふことだから種々の惡行は苦しい結果を來たすにより惡行を滅せねばならぬと云ふて滅するの謂である

(第四)道諦＝道は乃ち方法である即ち集と苦とを滅する方法であるから其滅する法は初めに云ふた通り聖敎の聲を聞て禪學をおして生を受くるの原因を斷絶する法であるが緣覺と畧相似て精神世界に歸入し生死自在を得るの禪法であるが矢張四禪八定や空無想と云ふ樣な觀念に漸々と入て大悟と云ふになるのじやから矢張如來禪じや

祖師禪と云ふのは初め云ふ通り學問智惠はいらんので之は師匠に付て一々證明をして貰ひ師弟相問答をして悟を得ると云ふ方であるが又中世に於て公案禪と云ふものが出來て古人の悟りを得た蹤蹟を擧て其眞意に適中せしめる樣にしたが之は眞實の禪と云ふ譯ではおけれども先づ今日の樣な人間の根機の衰へた時代に初門として甚だ適用である故後章に於て說明致すから此禪を始めにやると

自然に思慮を練ることが出來るから先づ之をやつて見るが宜しい夫れは古人の問答した事や說示めしたことや悟たと云ふ語や話に付て飽までも妄念分別思慮を推盡した終りに於て無念無心何も其語話に付いて考ふることなき樣に致した所で眞の妙所が現はれるのであるから十分やつたが好いと思ふ世間禪と云ふのは三界を脫出することの出來ぬ禪と云ふので三界の內で初禪二禪三禪四禪乃至空處と云ふ所へ生れる迄であるから世間耳の禪と云ふのである三界と云ふのは一寸初學に分りかねるけれども早く云をならば三の世界と云ふことで佛語で云ふと欲界色界無色界と云ふので欲界とは地獄餓鬼畜生修羅人間と天上界の一分とで此等の世界は色欲貪欲の最優等の世界であるから重き勝たるに簡んで欲界と名けたので吾人も其內である色界とは色は形と云ふ意味で佛敎では目に影するものは色ある故形を色と云ふたので此は天上界の中で欲もあるけれども比較的少ないのであるからである又た身体と云ふものも天上であるから云はゞ空ある處じやによつて矢張人間やなんぞとは異ある身体で一種特別の微細の色身と云ふて人間の目には見へぬもので餓鬼修羅と云ふものも此身体であるか此の處に

諸生物の食物

居つても見へぬものじやて居るか居ないか分らん其微細の身とは無色透明なる事水の樣世間の万物と觸りて障碍のないことは虛空の樣であるから百万數の天人や餓鬼でも一針上に居る事が出來て飛行自在で在て空氣を呼吸せぬとも死にはせぬけれど食物は矢張入用であるから餓鬼なども腹が減つても我が惡業の力によりて食物が咽に通らぬので其種類も九種ありて口が針の如く腹が大なる谷の如しじやとある身の量は三寸より乃至二十里程であるけれども大きいからとて碍はない命は二千七百万歳より一秒間で死するもある天上界の者も其の如くで食物は入用であるが其食物も矢張り微細の者である全体世界上生物の食物に形食香食見食觸食思食と云ふ五種あるので人間や畜生鳥虫等は形食と云ふて形のあるものを食して命を繋ぐのであるが其他の食で命を繋ぐのも往々あることで坐禪をしていると腹が減らんことがある消化せんのではない一週間もやつて見ると分るが古より山中で定に入つたと云話のある通りで其に付て種々面白い話がある昔支那唐の時代日本の孝德天皇の時代に玄奘三藏と云人が唐の天子の命により印度に趣きしとき印度の鳥鍛國を過ぎしに山崩れて其山中より一人の

冥目の僧あり髮鬚身体を覆て坐禪をして頓ばり落ちたればそこで其身体を洗ふて其前に於て鳴物を打鳴らしたれば(入定して居るを出す法があるのである)其僧忽ち目を開きて云ふ我本師迦葉佛は今何れにあるや(迦葉佛とは何億万年と云ふ先に出生した佛である)玄奘答て曰く最早入滅して幾千万年と僧又然らば釋迦佛の出世は如何玄奘答て曰く是又入滅して今を去ること千余年と時に其僧さよかと云ふや否や身体崩れて灰の如くなりしと是は滅定心と云ふて后に又明します が即ち思食と云ふて坐禪して思慮のみで命を何億万年とおく繋だものであるが問答をして思慮打絶へたから身死したのである此例は甚だある又見食と云ふは物を見て樂んで居て命を繋ぐと云ふので是も晋の國に王質と云ふもの山に薪を取りに行き道を迷ひ至る所二人の童子あり碁を圍ひを見て自ら其處に行きて見て居りしが偶々氣が付て歸ろと思ふて荷ひ棒や斧を見たら最早腐りて及は赤銹びとなり衣服も腐りて裸でありしと甚奇異の思ひで故家に至りて妻を呼べども更に答へざるゆへ我は汝の夫なりと云へども妻の曰く我夫は三十年前山に入りて死んで仕舞たれば左あることをしと云ひしが遂に夫なりと分りたりと云ふが

其甚を見て居りし間は實に三十年であつた是が見食として見て居て命が繋がつたのである又觸食とは喜樂に觸れると云ふ樣であつて色を見て愛着する如くで男女愛情遂ぐ能わずして戀病にて身痩せる如きは觸食せざるからである香食とは物の香ひを食するので佛檀に線香や食物を供へるも死人の靈が生れて居りし時の業によりて他へ生を受けぬと中生と云ふて微細の身体で居ることがある七日々々ごとに讀經とか逮夜とか云ふをするも七日目七日目が中生身体のかわり目であるから經理おぞを聞かせるので中生の時の勢力は強いもので金城鐵壁も障る事が出來ぬと云ふことでどんなことでも外國語でもなんでも分るそうじやが其時には香を臭ひで食物とすると云ふことで好き香を燒く程結好であるさてその天上界の微細身などは禪を悅んで食とするので種類も色々あるが觸もわり見もわり思食もわるので命は又差別われども九百万年より乃至無量年程であるけれど必ず盡きるものである身の量も半里より乃至三万里以上であるそんなことを云ふと虛言の樣に思ふが是が人間の想像力に乏しいと云ふのである人の毛端に住する虫に人間の大身を話しても信せざる樣で其迄云ふたら思半ばじやそんなことばかり云ふと本文よりも長くなるから夫で天人の微細なることも顯微鏡位では分らんがけれども形のあるものだからないものに簡んで色界則ち形界と云ふので無色界と云ふのは欲も形もなく心のみであるから精神界の一分であるけれども世間禪と云下級の禪によりて受くる世界であるから之も又一度は人間の樣な生を受けねばならぬものであるか其間永い時間ではあるけれども人の眠て居る樣なもので一度は起きねばならんから又苦を受けねばならんにより樂として安住すべきでないから世間禪と云ふのであるが又如來禪に屬するのである出世間禪とは以上の三界と云ものゝ外へ出でる禪であるから此禪であつたならば最早精神界に入り了つたので再び人間などには生れて來ないので精神界に於て樂を極める事が出來るから極樂世界と云ふたのじやから南無阿彌陀佛も何もいらぬことで夫は初に云ふ通り南無と云ふ心であると云ふた如くであるそれでこの禪にも又色々あるが聲聞や緣覺の禪も此中ではあるけれども佛の禪とは又違ふので佛の禪は自利利他で博愛主義であるけれども聲聞や緣覺の禪は自利のみであるから其結果に於ても同じ精神界であるけれども差別のありそふなことは推

知るべきであるから何んでも此の最高等の禪に如くはないのであるが初學に於ては以下說所の方法によりて漸々高上に至るべきであるけれども禪の主意が腹に入つて消化が出來た上は坐禪をせんかとて坐禪にあらざるおしじやが孔子の齊家は齊身々々は齊心であるから先づ齊身から始めたが宜ろしいかと思ひます

で其方法を說きましよう

第九章　禪學の方法

以上の所述で禪學の高下用不用は分ることですから單に方法丈けを陳べませう曹洞宗開祖之坐禪儀と云ふ本があるこれは短文で其意を盡してある初めに身を調へ次に呼吸を調へ次に心を調へるのである坐するには靜閑なる所が宜しい食物も節してそれから坐蒲團を厚く敷き安樂を旨として坐し先づ右の足を左の腔の上へ載せ左の足を右の腔の上へ載せるのであるが片足ばかり載せて痛が來たなら互に替へて上せても宜しい夫から衣帶を寬くして整しくし右の手を左の足の上に安し左の手を右の掌の上に置き兩方の拇指を相柱へて心を茲處に置き前

后左右に身を傾けず正直なることは鼻と臍と對し耳と肩と相對する樣にし舌を曲げて上の顎に掛け口を開けぬよふにし欠氣一息して鼻より微に息を通じ喘へがす長からず短からず喘けば結し短なれば勞し長なれば心散亂するにより中度を保て安寧にし几々として動かず山の如く亂想を調伏せしむべきであれば念想觀の識慮や心意識の運轉を止めるよふにして目を微に開き眠を防ぎ氣を尻の方へ靜める樣にして不思量と云ふ所を思慮するので不思量を思慮するのが非思慮であるから思慮すべき原因を斷切すべきであるが中々斷するの六ケ敷から先づ下に示す所の公案でも思慮拈提するに如かずであるが出來得べくは早く云ふた ら無念無心と云ふ樣に務めるのである其處で妙處が現はれるのであるから兎角やつて見ねばならん夫から時間をきめて時々起ちて一息半歩と云ふ位に靜に運動をするのが要である又坐を立つときには靜に心を放つて他事を念じ口を開き息を放ち靜に身を動かし肩より手を動かし足を下ろし身体を摩し緩然として起たねば骨節に變痛を起すにより注意すべきである夫れで身心息を調へるは以上の通りであるが其非思想を助ける法がある之を助觀と云ふので五種程ある

(第一)數息觀と云ふて中々初心の者は心が散亂して靜めんとする程亂れる樣な者であるから其心を一つおらしむる爲に已が息の出入を數ふるので一より十迄を數ふるを好しとするでわるが何邊でも繰反しては數へ緩おらす急おらず靜に數へるが宜しい斯くすると自然に心が散亂せぬ樣になる

(第二)不淨觀と云ふて心の散亂を止むるも婬欲等の心が起るものであれば此心を靜める爲に男女の身体は燒かば灰理まば土じや一度命を失ふたなら人も寄付かん程の者じや活き居る所が不淨と云ふてきたないだらけで目鼻耳口毛穴便穴一として淸おるはなしで一皮むいたら目にあてられぬじや肉つゝむ皮に迷ふ人心皮さへぬけば野邊の白骨であると云ふ考へを以たなら欲心を靜めることの出來るものではあると云ふものじやて吾人等云いつゝも行ひ難きは如何とも仕難きであるが併し成べくは斷ちたいと思ふが人情と云ふものは中々欲の爲にはきたないなぞと思ふ者ではない可成的反對の方で奇麗じやと思ふ者が十中の十じやそれから財寶等に欲が起つたならば自の分限を省み一度死んだそのときは持行く者は何もおし王侯大臣も妻子珍寶儘おらぬものなれば子孫に關係や衣食に關係おき限り國家に報ふると云ふの外は可成制せねばおらぬ觀念したおらば幾分の助にもおる夫だから僧侶の修業中は妻を持たぬ肉食や美食をせぬ素衣粗食でやるけれども修業所じやないのは哀悲すべきである

(第三)慈悲觀と云ふて假令始めの欲のないにした所で腹が立つたり蚊が螫いても惡いと云ふ考が起るからそふ云ふ以上の欲が起つては眞理や心休が現はれ悟り得ると云ふことは出來ぬから

瞋怒と云ふよな心をも治さめねばならんそれで假令蚤や蚊が螫た所が左程惡まぬがよい諸君等は罪咎もない魚鳥を殺戮して我身心をさへ悞ましむるじやないか鳥魚の心にしたら嫌人間が惡いだろと思ふ夫を思ふても少しは察すべきじや假令鳥獸魚虫にしても皆命の欲は同じ事で其生命を取るものは增長すると人の命でも取る樣におりて恤むと云ふ心の無くおるものわるから鳥虫でも多く殺すものは矢張仁慈の薄き殘忍の人である鳥虫と雖も靈魂に於ては差異おきもので唯前生に於て蒔きたる種子の惡しかりし爲めであると思はゞ實に憐むべきである人間と雖ども必ず鳥虫と生れるやも計り難きで人の牛又犬馬等に生れた驗は

日本今日に於ても往々例わることであるして見たら人間相互の間に於ても尙更嗔と云怒と云ふことを謹まねばならん故に人間互に同胞である親子の如くであると思ひ己れの欲せざる所人に施すなかれともわりで仁恕と云ふことせんと眞理を悟ることは出來ぬ予も不及ながら學問と云ふ學問を究めて見たが人間及他動物の關係上退化進化と云ふことに付ては同じ靈魂精神でないと云ふ眞理を發見したことがないに反して同体でわつて今日の行に依つて諸動物の生をも受くると云ふの眞理と例證とは眼耳に充滿されてわる以上は飯納的是認せざるを得ざる譯でわるから慈悲と云ふ觀念を起して瞋を靜めねばならん

(第四)因緣觀と云ふは以上の諸念が靜つても此身が常住のものでわるとか死んでも亦人は人に生れ得られるものでわるとか死んだら夫切り靈魂も何もいつたものじやない身心都滅じやと云ふ樣な考がわつては到底眞理は分らんからして此見解を治めねばならんにより三世因果則ち我行が來生の原因でわると云ふの理則ち始に述べた十二因緣と云ふ理を觀念するのが肝要で我此身体は僅か五十年が間心が借家をして居るのでわるから身体の欲に迷はされぬ樣精神の滋養をせねばならぬいくら身体なる借家を飾り肥したとて火災や水災が來た日には一朝の烟泡じやからして身体の欲を拋打たなら忠孝も霧されゝば禪學も出來る瞋恚も貪慾も打捨てることが出來るのでわるから其理を觀念して邪なる心を防がねばならんと云ふことでわる

(第五)念佛觀と云ふは精神昏沈して海上羅針を失ひたる如く茫然と取定めもなきに於ては佛に三十二相とて通常人間に非ざる殊勝の相で其中の白毫相とて眉間上に白き毫毛わりて光を放つと云相わり此相を現觀するが如く一心に觀つゞし精神の昏沈を除くを得るでわる又惡念百出とて種々なる罪惡的の惡事を起思すことわらば佛の群生物を憐むが如き佛智の功德を念せば佛は身命を捨ても他の爲に霧さんとし善をなさしめんと爲されるに我何を以てか惡事を思ひ爲すべけんやと一心に觀念すべし又身体種々に苦痛を起し厭惡の心起らば佛の苦業をおし唯他の爲にして己が爲めにわらざるを觀念せば我自らが爲にし何ぞ怠慢るべけん況して此身体借家の如き我物でわつて而も我自由にならざる死す時の如くでわつて何物が痛でわる何物が痛いと感するのでわるか化學的の抱合物何

物か此心を痛むるを得ん心に傷は付かんぞ痛むから痛めとの如く深く觀念をなさば遂に之を知らぬ樣になるものである何でも此障がわつて中々始めから思ふ樣には行かぬから少しくは辛抱をせねばならぬことじやが以上の五助觀を以て正禪定を助るのであるが其より正觀をなすので身心氣息を調ふだならば一つ此身心の相わることを忘れねばならぬので始めにも云ふた通り何物が身心の障碍をなし痛をなすのであるか燒かば灰埋まば土で影も形も止まらぬじや何をこんな身体の慾に迷ふのであるか此身相は假物であると觀じて身の身たる相を滅し盡すべきで夫が出來たらまた心の相を滅する樣務めねばならん何物が心であるか心と云物わるならばさ出でよ寒暑痛痒喜怒哀樂何がわるのじや世間の情想や慾に犯されて何を憂や苦や思ひ居たるか世上の有樣何であるか夢か幻か何物が此所へ生を受けたるか此の生何物かと觀念を凝らしたならば無心に住する事が甚だ容易である無心に住することが出來れば慾と云ふものも斷つことが出來る夫より段々思ひつめて思慮と云ふものをも斷ち切つて仕舞ひ無我と云ふて我わるを忘れると云ふ境界に住せねばならん夫より迷ひと云ふものをも一つ斷ち切るので身は是れ和合的の者で清淨にわらずと觀じ吾身心に向つて受くる所の者一として樂たるものなく皆苦であると觀じ心と云ふものも念々生滅するもので常住するものに非ずと觀じ世界萬物何物として和合乃ち化學的作用に因りて成りしものにて是と云ふて自性わるものにわらずと觀じならば世間の相一として實に相とすべきなく生とすべきものなく取るべきものもなく丸で空の身を以て空に處するが如くであつたならば心内に於て更に求むべきもなく望むべきもなく安閑無事の境となる故に慾も起らねば十二因緣と云ふことの愛とか取とか云樣な事も造ることがいらぬ樣になるからそこで無心と云樣な場合になり煩惱と云ふて惱やみ煩わすと云ふ事狀乃ち迷惑と云ふ愚痴がなくなるから病原も無くなり心配もなくなり生ながら佛と云ふ無慾無我の境界となり得るから遂に心体露現が出來て禪眼と云ふものが開けて万事が明となり遂に生死自在の樣を握り獨立活歩することが出來るのであるが茲で諸君が思ひ違をしては大に困るから一言じやが無慾じや無我じとて妻子の有るを捨置ではない家業を廢するでもない交際をせんでもない國家の爲め奮發をもせねばならん呑ます食はずにや居られぬ

から十分やるがよい唯分限知足が肝心である心は心で禪學でも身体は身体で世に處さねば何んにもならんから局端に走しると云ふ事丈は退けて置て話をせねばならんであります

第十章　禪學の手引

禪學の手引として古人の行蹟と種々の事蹟を例擧して參考に供するとしませう

生死を自在にしたる例證

印度や支那日本に於て大抵の高祖は生死自在で皆死期等も前知せられてゐつた其例證甚だ多いから一々枚擧するも煩はしきこと故畧して擧げん

達磨と云ふ人は南印度の香至王の第三子で蕭梁の普通元年に支那に來り推古天皇廿一年十二月朔日大和の片崗を御巡狩の節乞食樣の僧路傍に佇み其眼光甚だ奇異にして身体亦甚香しきを以て帝問玉ふも答へざれば和歌を以て問玉ふに僧亦和歌を以て答へたり因て帝上衣を脱で僧に與へ玉ひ歸輦の後夢られて再び僧を尋ねさせ玉ふに已に路傍に斃れ居たれば勅して葬らしめ而る後亦其僧の來るを夢み玉ふにより其墓を撥かしめ玉ふに棺内に賜衣の疊みあるのみ屍ゐるを見す帝大に怪んで凡僧に在らざるを知る時に聖德太子攝政たりしが其衣を取りて服し玉ふと云ふ聖德太子は十種の異勝ありとて甚だ聰明でゐつたと云ふことで誕生の異なるよりして二三歳の時にして一を聞て十を知り聖德天下の事欠くるなしとか八耳豐聰耳とて一時に八人の言語を聞取られ少しも誤なく訴を決し玉ふとか相貌優勝とか未然を知られ老智を具へられ行政の異なること前朝に比して廿四種云云など四十九歳に至られても即位し玉はず薨去の時人民悲泣せざるなきこと古今類なく高麗國の僧惠慈と云ふもの其薨去を聞き悲泣して曰く日本に聖人あり三統を包貫し黎元の危を救ふ實に大聖我異國なりとも斷金にあり我最早生き居るも益なしとて死せりと太子嘗て膳後に告て曰く汝と夫妻たることに已に五百生なり汝隔生即忘(隔生即忘とは人が生れる時の如く生を替へる時總ての事を忽ち忘ると云ふことで吾人等も胎内に於ては知りしなるも胎外へ出づる時苦痛に逼迫せられ前後忘却するも禪等の德あるものは苦痛も即忘もあること

なし)なるも我は憶持して忘れず故に今汝に話んとて云く我昔釋迦の會に居り遺

言を受けたるが故佛滅後千年に於て支那に來り白馬寺を建立し(白馬寺は寺の建て始めにて後漢の明帝の時代であるから三藏法師であつたので有らう)一代の說教を崇め衡山の般若臺峯に住し弘教す是れ第一の生なり次には衡州の王宮に生れ秦の文帝の儲位に推されたれども卽位せず十七歲に出家し衡山の峯に住し弘法し五十余にして寂す次には劉氏の家に生れ五岳道士の長吏となり文道を弘め廿三歲に出家し又衡山に住し五十九歲に寂す次には梁帝となりしも廿五歲に出家し又衡山に住し六十七歲に寂す次には梁の相公の家に生れ文武を敎導し三十五歲に出家し又衡山に住し六十一歲に寂す次には陳の末に生れ念禪法師となり又衡山に住し弘法して六十二歲に寂す云云斯の如くであるは皆禪定の力であるからして禪眼の爲め古今通了で万事明達であつたので是も太子傳の心と云ふ古書にあつた

又死期を前知して坐脫と云ふて坐りながら死んだ人が甚だ多い達磨より四代の道信五代の弘忍六代惠能を始とし高祖皆然りで日本でも道照慈訓傳敎空海榮西道元を始とし數ふるに遑なしである其から藤原藤房や北條時頼金澤越后守の妻

千代野奥州の性才楠正勝及其の子傑堂及正徹を始として復數ふも足らずである其から立亡と云ふて立ちながら死んだ人もある

達磨より三代僧粲は木の下にて合掌して死んだ霍山通禪師も火焰の中に立ながら死んだ辨慶も衣川に立往生じやと云ふこと之は余り例はないが入定したのはいくらもある

釋迦の高弟迦葉は雞足山中に入りて禪に住し五十六億七千万年后の彌勒と云佛の出世を待つと云ふことである

唐の時代の玄奘と云ふ人(今日釋迦の經を翻譯して現存するは皆此人が始である)が印度の高昌國に行たときに途中于闐國に牛角ちふ山に寺ありて其内の佛像光を放ち居ると雷て其佛像を說法せしことありと其の寺の後の岩中に入定して彌勒を待つと云ふ

復其國の南に多く羅漢塔ありて古松茂り泉あり三人の入定者岩石上にありて髮鬚長くかるにより年々其髮毛等を苅と云ふ

烏鍛國の入定の事は始にあり

又西南に閻盤陀國と云ふ所の東南に二大石室あり各一人宛入定して七百歳を經たと云ふことで毎年髪を斬ると云ふことである又晋の東林の惠遠法師の弟子惠持と云ふ人は微宗皇帝の政和三年に大樹内に入定して髪爪身を經ふ程で在つたが其處の役人が見て唐の國に行總持三藏と云ふ人に見せて定を出さしめたら我は遠の弟子であるが遠は恙なきかと云ふたから總持答て遠死し七百餘年を經たと云ふたら惠持はハヽと云ふたのみで再び言はず又陳留縣に往きて入定せんからとて再び石室に入るとか

又日本にては弘法大師も高野山の石室に入定して居るさうで其證據もある或る時一休和尚が其事を聞いて問答せんものと思ひ石室の前で一句歌ふた

弘法は虚空の定に入りもせで心狹くも穴に入るかな

と云ふた所が石室の中から弘法が返歌して云ふた

入りぬれば虚空も定もなきものを心狹くも穴と見るかな

と反對にやられて一休も之には閉口致したさうか

それから奥山の半僧坊小田原の道了權現役の小角若狹の八百比丘とか皆入定して居るもので往々あることであるが況して弘法かどは今に於てさへ其驗あると云ふことかれば靈魂不滅と云ふ理に付ても十分の證據であらうとシンク

まだ面白いのが支那に普化禪師と云ふ名僧があつたが常に市街を乞食して歩いて最早死せんとする頃に棺桶を製して擔ぎ廻て呼で云ふ我明日死せんと明日の日とかつたら多くの人が依り集つたとき棺桶は其處へ置て振鈴を鳴らしかがら天上へ登りて仕舞たと云ふことで其鈴音が永い間だ聞へたと云ふことじや

熊谷直實も中々不思議の芝居をしたが死す前年に我は明年何月死すとて故郷に於て高札を出したと云ふことで明年の其日になつたら人が皆見に來たがとんと死にはづれたそうで直實曰く我今日死すべきであつたが佛の告げにより三年を延ばしたれば三年后の何日に死すべしと人に相撓したが人皆信じもせなんだけれと又其日に多く集つたらば丁度其時刻に紫雲靉ひいて來て直實は夫に乗つたか乗らぬかは知らんが果して座しかがら死んだと云ふことじや

天長元年の大旱の節勅により弘法禪定に入りて雨を祈り二日を過ぎて三日間大雨ありと是禪の効の依るものである

又元翁和尚が那須野の殺生石を治めしも禪定の効であつて他宗高僧の及ばざりし所以であつた（例證比も足らずや）

禪學及佛教に志を傾けし人の例

支那に於て漢明帝を始として魏の太祖梁の武帝乃至帝王の多は入門せりとのことである

文中子亦禪に志せりと云ふことじやが嘗て房玄齡杜如晦門に集る文中曰く詩書盛而泰世亡非孔子罪玄虛長而晉室亂非老莊罪嘗戒修梁國亡非釋迦罪易不云苟非其人道不虛行云云これ證には非らざれども兎に角

柳子厚禪學に志すこと數年韓愈に與ふる書に曰く浮屠教儒語と合す聖又生ずとも得て斥くべからずと遂に南遷して禪人と遊ぶ

韓愈初め佛骨表を上り憲宗の爲に潮洲に流され大顛禪師に遇て大に前非を悔ひ三拜して謝し遂に佛門に歸す依て許されて又官に就を得たり

趙州＝六十歲にして南泉普願禪師に見へ道を得眞際禪師となる

張商英＝哲宗朝の人で藏經の嚴整を見孔教に如かずと知り無佛論を作りて佛教を毀る甞て維摩經を聞き遂に道を悟り翻心して護法論を著して大いに佛教を擧揚す

耶律楚材＝理宗朝の人文武兩道に達す中原を平定して禪に歸す萬松禪師に參し湛然居士と稱す

蒙潤＝佛に歸して法花を注す

隨文帝及明大祖大に佛に歸し古今未曾有の業をなす

蘇東坡＝禪に志す詩に曰く谿聲卽是廣長舌　山色淸淨身無有夜來八万四千偈他日如何擧似人　以て其如何を知るべしだ

苦梧儒士牟子＝獻帝初平二年理惑論を製し謗を解く佛に歸したる人の始めである

吳の孫權＝僧康僧の舍利を感得せしより大に嘆し益々佛を信ず

黃山谷＝李通＝玄鹿公＝斐休＝圭峰皆禪に入る

圭峰は儒にして進士たり斐休は集賢殿大學士たり

荆國王文曾て張文公に問ふ孔子后百年に孟子あり今は誰とせんや文公稍久して

曰く唯勝るものあるのみ曰く青原(達磨より七代の禪師)曰く南嶽曰く馬祖曰く石頭曰く丹霞曰く無業なり(是等の人皆其時代の禪僧にして諸宗の高祖なり)孔孟の教戒勒すれども住すべからず深く之を背ふとあり朱子の語錄にもあり問て曰く今の士太夫多く禪學に引去らるゝは如何んと朱子曰く他底は且く省くかの人誰か趨らず云云

王介甫は平生多の理を學び丁に宅を寺とす又曰く只他打併し心下清潔なるを得るに因て本朝の李文靖公王文正公揚文公劉元城呂申公都て是何人ぞ去て他を學ぶか　又曰く釋儒相似るの語あり有物先天地無形本寂寥能爲万象主不遂四時凋又曰く撲落非他物縱横不是塵山河幷大地全露法王身　又曰く若人識得心大地無寸土見よ他は何の見識ぞ今區々の小儒何ぞ他の手を引て出得んや宜なるかな他の爲に揮下せらる云云(朱子の言)

日本に於ても天皇にして戒を受けられし方三十八帝に及ぶ其外佛に皈せられしは多々云ふに及ばず臣家名門亦然り就中北條足利は禪に皈し織田は日蓮德川は天台淨土なり

藤原藤房＝建武二年薙髮して關山國師に禪を學び臨濟宗本山妙心寺の第二祖となり神光寂照禪師と謚らる圓鑑國師と加賜あり

武田信玄＝は天海僧正慈眼大師に常に法を聽き禪を學びき

藤原義滿＝鳥羽上皇に仕へ二十三歳の時より周遊して和歌を樂み禪を專らとせり西行法師卽ち是なり

大江匡房＝三朝に仕へ儒者の大統たり心を禪に傾け續往生傳を作る

楠正成＝湊川戰死の前日兵庫廣嚴寺明極俊禪師に見へ問て曰く生死交謝の時如何と師答て兩頭共に截斷して一劍天に寒しと

正成又問ふ畢竟如何師答て大喝一聲正成卽ち大悟して生死の自在を得たり尙以前孤峰大燈關山と云ふ禪師に禪を學べりと

楠正勝＝正儀の末子南朝亡びて後薙髮して禪を學び尺八を吹ゐて諸國を遊歷す人呼で虛無僧と云ふ之虛無僧の初なり傑堂禪師也

正徹＝かか〳〵に魂ならば故郷にかへらんものを今日の夕暮

いづるとも入る月を思はねば心にかゝる山の端なし

攝取庵慧春尼＝最乘寺了庵禪師の妹にて道を求む師女業の所學にわらずと尼乃ち燒火箸に顏を縱横に燒く師遂に禪を學ばしむ暮年に至り寺の門前の石上に薪を積み火を放ち其内に飛入て入定す師熱きかと問ふ尼曰く冷熱は生道人の知る所に非すと今尙其火定石ありと（小田原）

無外禪尼＝城陸奥守の女にして金澤越后の守に嫁し中年夫を離れ佛光國師に薙髮し禪を學び桶水の月影を見て大悟す眞如寺を建て坐して沒す

北條時賴＝初大覺禪師に學び兀庵和尙に參禪して大悟せり道元禪師にも參せり建長寺を建て弘長三年坐して沒す

嵯峨帝の皇子顯月と云ふ十六才聖一國師に從ひ草を苅り蚯蚓を斬り兩あがら動を見て何れに佛性ありと問ふ師答て須彌不高大海不深と皇子乃ち了す時に二十才ありと后兀庵禪師に參禪して大悟し正和五年遺偈を作て坐して沒す佛國應供國師と云ふ人是あり

以上は只一例を擧ぐるのみで古代より大抵の王侯武人は皆參禪に志ざせしもの

多ければ數ふるの要はないよふである

初學の人は心を靜むる爲め左の歌や話を考へて見玉へ臨濟黃檗では多く此の樣なものをやつて禪の助けとして居るとのこと

公案　佛法は障子の引手峰の松火打袋に鶯の聲　（隨緣眞如）

同　佛とは如何あるものを云ふやらん墨繪に書きし松風の音　（不變眞如）

同　堀らぬ井に涌ぬ泉か波立つて影も形もなき人ぞ汲む　（無造作用）

同　耳に見て目に聞くあらば疑はじ命ありけり軒の玉水

同　春は花夏ほとゝぎす秋は月冬雪ふりて涼しかるらん

同　草も木も佛になると說く法の信現はす山櫻かな　（和泉）

以上の歌は何んでもない易ゐものであるが一つ說明をして見よならば佛法は障子の引手や峰の松やとか障子や松と云ふたからとてさて障子はあんである松はあんであるあぞ分別を入れるから面白くない障子や松に限やせぬ何でもよい手でも足でも猫でも杓子でもそんなことにやかゝはらんあるが儘でよい障子は障子引手は引手の働がある松は松の用がある綿は柔ゐ石は堅ゐ其が普通じや足は

(七四) 歩るくものじや何が不思議があるか佛法には不思議おしじや唯人の心は浮やふやとしてをるから靜めるだけで信の道に氣をつけさすまでじや雀はちゆ鳥はかじやそれが道じや然るに雀がかと鳴ねたり鳥がちゆとおいたら其こそ非道じや障子も佛法じや松も佛法じや柳は緑で花は紅ひで異たことは更にない夫が眞の道じや火打袋も鶯も夫は夫なりじやおいか夫を何をせいこふせいと云ふのでおい火は熱く水は冷いと知れば夫が佛法であると氣が付けば先づ道に庶かしでわるから是で思ひ半ばであろふおんでも影や形に氣を止めたら大違ひよくか考ゑ

公案 (伊勢の海千尋の底の一つ石袖ぬらさずに取るよしもかな)

是もその通りじや海の底や深い事に氣を取られちやわかん海じやと思ふたら遠して遠しですで佛道でお世間普通の事でよいのじや佛道と云ふことも前述の通りで世間の道が佛道であるからその氣の付けようが肝心じや　又左の樣なことがある

公案 (千尺も深ゐ井中に陥て居る人を一寸の繩もおしで上て御覽)

さ井戸と云ふ事に心をあてゝ見ねばおらんそんお井があるかね

公案 原坦山和尚が或時本堂の眞中へ仰向に倒れてさわ誰か手を付けずに起せ起されねば皆此處に居る事ならん荷物を擔ねで行けと云ふたことがあるそふだ諸君一つ起して見給へ一つ氣の付け所

公案 (汝心あるならさ此處へ一つ出して見よ出さぬがどうじゃ)

是も或る人が云たことであるが一つ出して見ゐるか考所じや又昔し俱低と云人は人が物を問ふと直に一指を竪つる耳で更に答をせなんだと云ふことで其處に小童が居て又眞似をして人が問ふと直に指を竪るから或時俱低が呼んで問ふたら又指を竪てたから鋏で指を斬て仕舞た小童は泣て逃たから又後から問を掛けたら小童は平生の習慣で又指を竪てんとした所が指が無かつて初めて氣が付いて大悟をしたと云ふことじや　是又一つ見所

諸君此指は何の爲か能く一つ考へて見たか宜敷が指を認めてはおらん指の用をよく見たおらば同樣に悟が出來る

以上はほんの初學の爲に例した迄であるから公案(公府の案牘と云ふので佛語に用いただけで一定の禪學的規案と思へばよい)

(七五)

（夫）禪をやろと思ふ人は禪學の僧に尋ねて授けて貰ふが宜しゐが只是等は禪と云ふ禪ではないのであるから只補助として佛敎の眞意を知らしめる位のものであるが好く暇に向つて心念を練たならば漸々前章に述ぶるが如く高尙の快樂を得て極りなきに至るのであるから可成局端と云ふ方へ走らずに研究をして生死自在の大權を得て世界を掌中にせられんこと希望致します

教育應用 **禪學捷徑** 終

一休和尚旅行の節一婦の河に洗濯するものあるを見て直に其後を追ひ其を脫で三拜す或る人怪しみて其故を問一休一句を詠む

女をば法の山藏とよく云ふた
釋迦も達磨もひよいくと出る

禪學捷徑附錄

禪學と靈魂不滅と南無阿彌陀佛と南無妙法蓮華經との關係

世人の多くが佛と云ふ觀念に於ては誤解も亦甚しいものであつて佛と云はゞ乍ちに形式的の想像を企でゝ天上や雲中に居て光明赫耀として實に不可思議の能力を有するものであると云ふ樣な淺薄なる考が充たされてゐるので丁度佛敎は地獄極樂の形式が本態であると思ふて居るも同然なのであるから首を入れるものが少ないので少しでも其道に入て見ると非常に愉快を生じて隨分研究もする樣になるけれど中々其迄にゐるのが困難な話であるから今題の樣なことを少しく解釋しようと思ふので禪學とは前にも申す通りで究竟心の本体を徹見するので其本体が即ち靈魂不滅と云ふの理に基くので佛敎の究竟を南無阿彌陀佛と云

ふので南無阿彌陀佛と云ふことは乃ち靈魂不滅と云ふことがある夫れで南無阿彌陀佛と云ふことは皆印度語で和譯をすれば南無と云ふことは歸命と云ふことで歸命とは命は天命と云ふよなもので人生の根本と云ふこと歸とは反ると云ふ意であれば元へ反ると云ふので卽ち元を原ぬると云ふ意であるから人生の本源を原ねて見れば阿彌陀佛であると云ふので阿彌陀とは無量壽と云ふことで無量壽とは限りなき壽と云ふのであるから人間の心と云ふものは何億万年を經ると も死滅すると云ふことはなく限なく續いて命を保つと云ふ意味で是が靈魂不滅と云ふ義である佛とは其理を覺り悟つたと云ふ義で本体は靈魂不滅であると云ふことを了解したと云が如くである又佛とは如來と譯するので如來とは字の如く來るが如しと云ふので不生不滅清淨潔白の靈魂であるべきものが人畜動物に生れ來つたと云ふからして來るが如しであつて實は來るべきものでないものが一の迷に依つて佛と云ふ精神が假りに迷の業力に乘じて人畜等の現生を受來つたと云ふ意であるから南無妙法蓮華經によりて元の佛と云ふ清淨潔白の位置に歸り再び人畜の樣な汚穢なる生を受くべからすと云ふが佛敎の原理と云ふもの

で其理を徹見するのが禪であるからして佛敎中何れの宗と雖も少しも禪學を離れることが出來ぬので南無妙法蓮華經と云ふも禪の往來で南無とは前進の如く妙とは奇妙と云ふて人力では思議すべからすと云ふよなもの法は人畜動物より佛と云ふ悟了の精神を得る方法と云ふので蓮とは荷のことで蓮は泥中に在りながら清淨の花を保つと云ふ例證であつて人畜等の汚穢的の者でも清淨の精神を保持したならば是が人畜泥中の蓮花卽佛と同然であると云ふことで經とはこりや誰れも熟知せらる通りで糸筋と云ふ字で万世に亘りても易らざる道と云ふ義であるから總じて云へば佛と云ふ本体の覺悟了徹の位置に進む方法は蓮の如くであると云に擬して禪學の要を說明したものであるからして南無阿彌陀佛を以て靈魂の不滅を證明し妙法蓮華經に依つて靈魂不滅乃ち佛の悟了の境界に至る法を說得たものであれば換言せば禪に依つて佛と云ふ安樂なる精神世界に到り得ると云ふ意義であるからして禪學は何敎にも何宗にも必要あらざるはないのである然るに念佛とか唱題目として南無阿彌陀佛南無妙法蓮華經と口に云はしむるのは生ちに禪と云ふものを了解することが出來ぬから其初門の方便として唱

言させるものであるが矢張り禪學中の念佛禪であつて何をするのも少しも禪に對しては異變がないと云ふことは前述によりて了解されるであろう

以上斯の如くで喘碎て見たならば別に六ヶ敷いことはないのであるが左に禪に關したる道歌を一つ二つ列べて見ませう

佛とは如何なるものを云ふやらん
すみ繪にかきし松かせのおと

佛法は障子の引手みねの松
火うち袋にうぐひすの聲

佛法は鍋のさかやき石のひげ
ゑにかく竹のともすれの聲

春は花夏ほとゝぎす秋は月
冬雪ふりて涼しかるらん

花ははゐ紅葉はもみじそのまゝに
ゆわで敎ゆる我のりの道

騷がしき蜂の虱やいそのなみ
これみな法のみ聲なりけり

耳に見て目に聞くからばうたがわじ
いのちかりけり軒の玉水

草も木も佛になると說く法の
まことわらはす山櫻かな

妙法はふすまの引手峰のまつ
やりのすぶくろ長刀のさや

佛とは心もからず身もからず
からぬ者こそほとけなりけり

夜もすがら心の行くへたづぬれば
きのふの空にとふとりの跡

心にも及ばぬ者やあるらんと
心にとへば心かりけり

一休
佛國
元政

心をばこゝろの仇と心得て　一遍

こゝろ無をこゝろとは知れ　瑩山

佛とは何がなるみの汐干潟　興聖宗淳

心何國におき津しらなみ

誰もみなもたる心を橋として　宏振

上なる道に遊ぶうれしさ

物おもふ心やむるも物おもい

ものおもふだも心ともあり

法の道きくに心のさだまれば　親鸞

淨土は北や南にもある

思はじとおもふも物をおもふなり

思はじとだに思ふものかな

心とは如何なるものを云ふやらん

目には見へねど天地一ぱい

聞わくる心の內の誠こそ

教によらぬ悟なりけり

心とて實にはこゝろの無きものを

さとれはなしの悟なるらん

悟とは悟らぬ先がさとりなり

さとりて見れば方角もなし

心なき植木も法をとくなれば

はなも悟りをさぞ開くらん

我ものと思へどまゝにならざるは

じゆう自在のこゝろなりけり

隔てぬる地獄天堂よく見れば

只一心のしわざなりけり

人毎に換るゝ夢の迷にて

醒れば同じ心なりけり

左に掲ぐるは原人論として支那の宗密と云僧の著で人生の根元を論じたるものにて人生上摘要なるものであるから和譯して一覽に供へよと思ひます夫れで是文を見たならば人間の生來も十分に明にありましようし又靈魂の不滅と云ふことも分りましよ

第一番に儒教や道教に云ふ所の人間の生源を說き次に佛教中の小乘教より大乘教へと漸々深き教に入りて后に眞實の生源を明してあります委しきこと原人論と云ふ原書を翻かば十分であります

却說儒教道教では人畜等は皆是れ虛無の大道より生成養育するものであるとて曰く道は自然と云道理より元氣を生じ元氣は天地を生じ天地は万物を生ずるが故に死したる后は又天地に皈して其虛無に復すと云ふので其處で宗密が批難して云ふには儒教道教では但身体があるから行を立つるので有つて身の眞由を究竟するではなく大道を以て根本とするけれども如何なる順序因緣に依つて身体を生成すると云ふことを明さぬので又其を習ふ者亦其れに安心をして權(仮)なること知らず信に究竟の旨であるとして居るからして今一々夫を問詰めんとて

曰く若萬物が虛無の大道より生ずと云ふならば大道は卽是生死賢愚吉凶禍福の基本であるから其基本が常に存してあるならば禍乱凶愚は人力等では到底除くことは出來ぬ復福慶賢善も益すことの出來ぬものであればそんな教を用ふるの要はないものである又道は世間に害ある虎狼や蛇蝎を養ひ桀王紂王の樣なものを胎ましめ顏回や冉伯牛の樣な賢人を夭死せしめ伯夷叔齊を不幸に陷らしめる樣な大道ならば尊と名づくることは出來ぬ譯で又萬物自然に生化して因緣でないと云ふならば因緣のなき所の草が石を生じ人が畜類等を產みそうな譯である又生るゝにも前後早晩と云ふこともあきはづで米麥豆等が時節なしに時種し又は稔るはづである泰平の世にするにも賢良の臣もいらず仁義を行はしめるにも教習はいらぬはづである又皆元氣より生ずと云ふならば忽ち生れた所の嬰兒でも其場で物事を辨じ言論も出來るはづである若自然にして便ち能く念に隨て愛惡すと云ふならば又念に隨て解することで習學することもいらぬはづである又生ひは乍ち氣を稟けて有り死は氣散じて乍ち無であるならば儒道二教にも常に鬼神と云ことを說て居るが誰を鬼神とするのであるか且つ世間には前生のことを

此例原本に委し

靈達し未來の事を知るものが往々あるは何故であるか是忽ち氣を稟て生ある理ではあかろう必ず前生よりの相續である又今世に於て來生のことを知て其靈驗のありし話は古書にも多くある通で決して死は忽ち無と云ふ譯ではあかろふ其故に武王が文王の廟に祈りて驗ある如く常に祀祭をするでもないか書經金縢篇にも其例もあり況んや死して蘇生するものが幽塗の事を說き死後妻子を感動し怨恩に響報する等の例古今甚だあるではないかして見たなら以上の云ふ所是因緣より生じ乃至前生后生靈魂相續する故であるではないか若斯く云ふたならば二敎は果して云はん若し人死して鬼神となるならば古來の鬼巷路に充塞せん見る者あるべきに何ぞ然らざるやと答て云はん人死したから六道とて夫れ夫れ地獄餓鬼畜生人間天上と生るゝので古來の鬼常に存するはづはない且天地の氣本と無知であるに人が其無知を稟て忽ちに起ち知ることあるは何故であるか草木も皆氣を稟て居るに何ぞ人の如く知識がないのであるか又貧富貴賤吉凶禍福皆天命によると云ふならば天何ぞ貧賤多く富貴少なく禍多く福少ない樣な不公平あるは何であるか況んや桀紂の樣な行ないものも貴き王となり堯舜の樣な仁行

の人が賤きに居り齊の景公の樣な無德でも富み顏回の德ある者が一簞の食一瓢の飲として貧きに居り且つ夭死し盜跖の逆者が長壽で孔孟が無位で了り桓魋の無道者を興すものは何故であるか既に皆天に由るとしたならば天は不道を興して有道を喪ぼすのである何ぞや善に福を賞し淫を罰する樣なことはあるはづがなく又禍亂反逆天命によるならば聖人敎を設て人ばかりを責め何ぞ天命を責めんのであるか人を罪して天命を罪せぬのであるか是大に當らぬことである然らば詩經に亂世を刺しり書經の中に王道を讚め禮記の中に安土を稱し樂記の中に移風を號する樣では之れ天命の意を奉じ造化の心に順するはづはあかろふ以上斯の如くであれば是れ未だ人の生源を知ることは出來ぬ譯である

佛敎中の人天敎に於ては三世の業報善惡因果を說て上品の十惡を造れば死して地獄に墮し中品の惡は餓鬼下品の惡は畜生に生ると說くが故に佛が五常の敎に類して五戒を持たしめ以上の三道に生ることを免れて人間に生ずる樣にして四禪八定と云ふ禪學を修めさせて天上に生ずることを說かれたから人天敎と云ふので此敎では業を身の生源として居るから之を詰て云ふ已に造業により五道の

身を受るならば誰人が業を造り誰人が報を受るのであるか此手足眼耳手足が業を造ると云ふならば初て死したる人の眼耳手足は其儘であるが何ぞ見聞造作せないか若心が造ると云ふならば此心肉心であると云ふならば肉心は質あつて身内に繋がる何ぞ速に眼耳に入て是非を辨することをせぬか是非を知らずば何ぞ取捨が出來ようか且つ心と手足俱に質關をなす豈内外相通じ運動應接して同じく業緣を造ることが出るはずはかい若又是れ喜怒愛惡身口を發動し業を造らしむと云ふならば其喜怒の態何を主として業を作るのであるか若又別々にでなく身心都て業を造ると云ふならば此身死して誰が苦樂の報を受るのであるか若死后更に身あると云ふなら今日の身心罪を造り福を修し后世の身心苦樂の果を受るならば福を修する者の屈甚しく造罪の者幸甚の譯である何ぞ神理斯樣な無道なのであるか是此教は未だ身の本を知らぬのである

次に小乘教は身心は無始より因緣の力により念々生滅して水の流れて止まざる如く死しては生れ生れては死し身心和合一の如く常の如く愚凡之を執して我主とし貪嗔等の爲に業を造り人畜等の身を受くる譯であると是れ身本我にあらざ

るを我と執するからである此身は色心和合に依て相と現はれたので此身は固体液体氣体及熱の和合であつて心は五感や識意の和合である若我と云ふなら八我である(身は地水火風心は受想行識)とした為ら尚各別にすると骨肉脾腎喜怒愛樂皆我であるして見れば一身心の中多の我主紛乱であるとしたなら業を造たり受たりする我を辨することは出來ぬ譯であれば是我と云ふべきものはないから誰の爲に殺盜し修善をするのであるか故に是の身の本を知らず色心の二法と貪嗔痴を以て身の本とするからして取るに足らぬ話である

次に法相教では一切の動物無始より己來法爾として八種の識ありて其八識中第八の阿賴耶識(譯して無滅識と云ふ)を身の根本とし其の識より萬物を造り出すと云ふので七識も亦是より起るのであるから識の外に實物はないことである是れ哲學の唯心論である夫れで第八の識が種々に變現する相を愚痴の故に實に有りと思ふので實に有るやうに見ゆるのである又第六七の意識と云ものも實に有りと執するので之煩惱と云ふ迷欲の爲であるのは丁度夢を見るときなきものを有と思ふが如く醒て始て夢なるを知覺する樣なものである我身も又斯樣なものでで

第八識の所變であるを斯く思わず我ありと誤慮するから惑を起し業を造り生死窮りのなきようになるので身は卽ち此第八識が原であるとする譯である

次に破相教と云ふ教義により又以上の理を詰て云ふ所變の物が妄であると云ふならば能變の識も亦た妄であければならぬことは仮令ば波を妄と云ふならば水も妄であければならぬに水が眞であれば波も眞である譯であるから一有一無と云ふならば夢見るとき見る物も亦物ではなく夢亦物でない然るに寤來りて夢滅するも物現存するで[illegible]はないか又物が夢であければ是眞物である夢若し物であければ何を相とするのであるかして見たならば夢の時夢想と夢物と異なるに似たれども均しく虛妄でありて都て所有はないことで諸識も亦然りであれば衆緣に現はれたもので自性はないのである故に中觀論中に一法として因緣より生せざるもなし故に一切の法は空と說くとあり又起信論には妄念の故に差別を見る若心念を離れば一切の境界の相なし故に所有の相は虛空であるからして相を離れたるを佛と云ふとあれば此教では空を以て元とするであるが(儒教の空とは異意)

今又此教を詰て曰く若心境無ならば無を知る者は誰であるか又眞の水が無かつ

たならば妄と云ふの波もあるはづはないことは鏡の眞がなければ妄の影の映ずることがないと同然である心鏡共に空ならば何に依てか萬物等の妄が現ずるのであるか故に知る此教も未だ眞實の人生は盡さぬ譯であるから次に

顯性教にて眞實の人生を說明してある曰く一切の動物皆本覺の眞心として無始已來淸淨潔白なる不生不滅なる所の性がある、ので照々丁々として常に知る所の者卽ち佛性と云ふものであるから又如來藏と名くるので虛空木石とは同じからざるものにて動物迷悟の源で無始の時より煩惱又は無明と云ふて月に黑雲の係りて見えざる如く迷欲の雲の爲に自ら眞の明月の如き心であることを覺知せず人身を認めて我主のものとし四大五蘊として始に云ふた地水火風と受想行識の假に和合して身心を形くりたる者であると云ふことを自知せぬ所から種々の貪欲を起し殺盜等をなし業を造りて遂四苦八苦不自由なる身心を造り來つたのであるから死しては生れ生れては死し井戸の車の廻るが如く人畜等へ生れ換り死に換り際限なき苦界の有樣を現ずるが故に佛其を愍み元の心乃悟覺の位置に立還らんとて種々の法を說かれた譯であるからして禪學を修せば其根元を明に了知す

ることを得て迷を去ることが出來るのである其れであるから行は佛行に依り心は佛心に契はしめ本源に還つて罪惡となるべき薫習を斷じさうしてしまつたならば遂に佛の境界乃ち安樂なる精神世界に入り終りて再び人畜等の苦しき世界に生れ來ることはいらぬ有樣となるのである是が佛敎に云ふ所の極樂世界であつて十万億佛土と云ふやうな遠い所ではない悟つたならば其場が極樂であるから禪宗では卽心卽佛として人生は以上の如きものであると悟得たる心が卽佛であるといひ眞言宗等では卽心成佛といひ眞宗淨土の如き宗旨で卽得往生と云ふのであるから假令今日の人畜等の迷心も元是れ佛心同一の者であることは以上の如くで迷を破り拂ふたなら卽ち悟の佛と云ふものであるして見れば迷悟も同じく一心で佛も動物も同一心であると云ふことが明かであるから人生の根源は佛である覺心であると云ふが究竟の人生である故禪學を究め一度玲瓏たる心を得たならば益々進んで究めたが宜いさうしたならば遂には悟了の地に至りて世間に向つて何一つ知らぬ分らぬと云ふことはなく實に愉快此上もなき次第である

夫れで今前上から云ふたならば儒道二敎も亦之なりで其所に安んじて止りて究

竟の所とするから原人上排斥するにあれども之れ淺敎も亦高きに登るの階梯千里の一歩なれば漸々に修學すべきであるのは丁度佛敎は禪門に入り人心開發悟了するの手段方便階梯として南無阿彌陀佛を唱へさしむると同一理であることが又小學校より中學中學より大學と登進して大學者の位置に進むと同じであるから小學や中學に安んじて學問は之で究竟なりとする者がある故其者を排斥して上に登らせねばならぬ譯があるから其位置の安せずと益々研究をせねばならぬことで今佛行や佛心と云ふたからとて何も六ケ敷事はない佛と云ふことに付ては吳々も云ふ通りであるから最早知られたであろうが佛行とは慈悲と云ふより外はない慈悲と云ふ心があつたなら殺生盜暴妄語の出來るはづはない國の法律でさへが禁ぜられたものであれば人道に背かない限りが乃はち佛行佛心であれば別に云ふべき事もない譯であるが以上の理により殆んど人生の根源も十分明かになりたる上は宜敢元泉たる佛心に立還ることを努ねば生涯苦辛は免れぬ事であるから氣の付た時を期として本心に立還つたが宜數ゐ人生無常とて何時死すやも計られざる有樣であれば死期に臨んでは到底間に合はずであるから少

と雖も安心のならぬ世の做らい茲に至れば思ひ半ばに過ぎん
身の樂はいつまで草にかく露の月に宿かすかりのたわむれ
果てはみな扇の骨や秋の風
花と見ん人は程なくありにけり我また風を待と知るかん
今日も暮しと計り鐘きいて身の行末を知る人ぞなき
蕾むより散るべき色のものなれや嵐に花はやぞるなりけり
露をかど化かる物と思ひけん我身も草もかかぬ計りぞ
年々に年は新になりぬれど新にならぬ人の命よ
出る息の入るをもまたぬ世の中に又こん春もたのまればこそ
露とかき露ときえぬる我身かなにはのこと夢の世のなか
形こそ深山かくれの朽木なれ心は花にかさばなりなん
長夜のふけゆく月を眺ても近づく闇を知る人ぞなき
身にそふは頭巾袷衣杖眼鏡湯たんぽかんじやくしゆ瓶孫の手

禪學捷徑附錄

大尾

明治三十五年八月十五日印刷
明治三十五年八月二十日發行

定價金參拾五錢

著作者　一色巖
東京市京橋區南鞘町六番地

發行者　玉木彌市
東京市下谷區谷中三崎町五十番地

印刷者　前田與一
大阪市東區備後町四丁目

發行所　小谷書店
（電話東千七百十番）

不許複製

發賣元

東京市神田區今川小路一丁目（電話本局七六六四番）　金刺書店
東京市神田區姥子町（電話本局一四八四番）　岡崎屋書店
京都市上京因幡堂町通押小路　弘文堂書店
大阪市東區今橋四丁目（電話東局參一五四番）　小谷書店

92
278

019597-000-9

92-278

禅学捷径

一色　雲巌／著

M35.8

ABG-0371